

東国における 古墳時代地域経営の諸段階

上毛野地域を中心として

Staged Development of Regional Governance in the Eastern Provinces
in the Kofun Period : Focusing on Kamitsukeno Province

若狭 徹

WAKASA Toru

はじめに

①古墳成立期における集団移入と東国の形成

②中期における共立の歴史的背景

③後期の地域経営と屯倉

まとめ

【論文要旨】

東国の上毛野地域を軸に据えて、古墳時代の地域開発と社会変容の諸段階について考察した。前期前半は東海西部からの大規模な集団移動によって、東国の低湿地開発が大規模に推し進められるとともに、畿内から関東内陸部まで連続する水上交通ネットワークが構築された。在来弥生集団は再編され、農業生産力の向上を達成した首長層が、大型前方後方墳・前方後円墳を築造した。

前期後半から中期初頭は、最大首長墓にヤマトの佐紀古墳群の規格が採用され、佐紀王権との連携が考えられる。一河川水利を超えた広域水利網の構築、広域交通拠点の掌握という2点の理由によって、上毛野半分程度の範囲で首長の共立が推し進められた。また、集団合意形成のための象徴施設である大規模な首長居館が成立している。

中期前半には東国最大の前方後円墳の太田天神山古墳が成立したが、河内の古市古墳群を造営した王権との連合の所産とみられる。この頃から東国に朝鮮半島文物が移入されることから、倭王権に呼応して対外進出・対外交流を行うために外交・軍事指揮者を選任したことが巨大前方後円墳の成立背景と考えた。中期後半には渡来人や外来技術が獲得されたため、共立の必要性は解消し、各水系の首長がそれぞれ渡来人を編成して地域経済を活性化させている。

後期の継体期には、東国最大の七輿山古墳が成立したが、その成立母体が解消すると、複数の中型前方後円墳が多数併存するようになる。こうした考古学的な遺跡動態や、古代碑・『日本書紀』『万葉集』などの文献の検討を合わせて、屯倉の成立と地域開発の在り方を考えた。武蔵国造の乱にも触れ、緑野屯倉・佐野屯倉の実態ならびに上毛野国造との関係性についても論及した。

【キーワード】 集団移動, 低地開発, 水運拠点, 軍事指揮者, 渡来技術, 屯倉, 国造

はじめに

共同研究のテーマ「東アジアにおける倭世界の実態」に則り、古墳時代における倭国の東縁を担った「東国」の在地首長による地域経営のあり方を概観し、東国と倭王権との関係、東国と東アジアの関係について予察する。古墳前期に関しては、集団移入と地域再編ならびに新たな農業開発、中期については共立王の成立と諸豪族の対外交流・外征ならびに渡来文物の移入、後期に関しては王権と地方屯倉の関係、これらのトピックを扱っていく。なおここでの東国は、碓氷峠、足柄峠以東の関東地方（坂東アヅマ）に限定し、なかでも上毛野地域（現在の群馬県地域）の様相が日本古墳時代を考えるうえで一つのモデルとなりうると仮定して、論の中核に据えていく。

①……………古墳成立期における集団移入と東国の形成

1 集団の大規模移入

弥生後期の状況

古墳時代に先立つ弥生時代後期の関東には、大別して4つの文化圏がある（図1）。

一つは久ヶ原式系土器とその隣接の文化圏で、東京湾岸文化圏とも言い換えられる（①地域）。東京湾を挟んだ兩岸の上総・相模・南武蔵地域に相当し、沈線と縄文で加飾した壺を共有する。これに平底甕を組み合わせる東京湾東岸（上総）と、台付甕を組み合わせる東京湾西岸地域（相模、武蔵南部の大宮台地）に地域色が細別される。墓制は方形周溝墓が主体である。

二つめは、寸胴型の壺と甕に、縄文や櫛描文を飾る土器様式が広がる地域圏（②地域）で、古代に存在した広大な内海である香取海（これが縮小したのが現在の霞が浦）を囲んだ下毛野・常陸・下総地域である。地域内で少しずつ属性を離れた小様式圏が分布し、十王台式（常陸北部）・二軒屋式（下毛野）・上稲吉式（常陸南部の香取海周囲）・臼井南式（下総北部香取海南岸）などが並存する。この地域には周溝墓が採用されず、環濠集落も存在しない。

三つめは、上毛野西部から武蔵北部に広がる樽式土器の文化圏（③地域）である。信濃から関東地方にかけての中部高地型櫛描文土器の大様式圏の一角を構成する。櫛描文と赤彩で土器を装飾することを特徴とし、壺・甕・台付甕・高杯・鉢・有孔鉢・蓋など多彩な器種で構成される。主たる墓制は方形周溝墓・円形周溝墓で、埋葬施設に磔床墓を組み合わせる。

四つめとして、武蔵中部の荒川流域を中心として、壺・甕の全てを単節縄文で加飾する吉ヶ谷式が存在している（④地域）。方形周溝墓を墓制として保持する。

以上の4地域は、水系や地勢に立脚した農業経営集団によって形成された最小の文化範囲を示すもので、古墳時代以降にも地域圏の指標として活用できる。②地域ではやや差異の大きい小様式が並存しているが、他の3地域の内部における様式差は少ない。このことは、②地域の小様式がそれぞれ閉じた社会システムの中に置かれていたことを示しており、この地域でリーダー層の成長を示唆するような墓制（周溝墓）が発達しないことや、威信財的な遺物（鉄剣や鉄釧等）がほとんど出

土しないことと整合的である。

東海集団の大規模移入

南関東のうち相模湾・東京湾西岸では、弥生後期前半から中葉にかけて以下に述べる東海東部系土器の大規模な移入が知られている [図1, 比田井 1993, 松本完 1993 西川 2001 など]。相模では、相模川西岸に東遠江(菊川式)・駿河(雌鹿塚式)の土器が、また相模川東岸には東三河(寄道式)と西遠江(伊場式)の土器が濃厚にみられ、南武蔵には東遠江、駿河の土器が移入されるとともに、環濠集落が集中して形成される。中期後半の宮ノ台文化が解体した後、集落再編と久ヶ原式の成立がみられ、その外縁に東海東部系土器の移入が生じたのである。これらはい



図1 弥生後期の土器様式圏と集団移動

ずれも型式属性や土器組成が故地と同じでありながら、胎土は在地のものであり、また当初は故地の様式に忠実であったものが次第に在地化し、台付甕文化圏を広く成立させている。これらの状況は、大規模な入植集団による地域再開発とその定着の道筋を示していると考えられる [大村 2015]。

続いて、弥生終末期から古墳時代初頭にかけても集団移動が確認できる。①地域では弥生後期の様相を引き継いだ土器様式が展開するなか外來系土器の混成が認められるが、②地域では主として東京湾岸系土器(内房地域)のまとまった移動が認められ、在地の土器群を一変させることが知られている。それまで不詳だった方形周溝墓や方形環濠集落も出現している。大村直はこれを「終末期開拓移住」と性格付ける [比田井 2004, 大村 2015]。

一方、③地域には、畿内の庄内式後半から布留0式並行期にS字口縁台付甕を中核とした東海西部系土器(元屋敷式系, 図2・4)が出現する [田口 1981, 若狭 2007]。この時期に東海西部系土器の参入が厚くみられるのが、在来弥生集団が進出していなかった上毛野利根川沿岸低地部や武蔵北部の利根川・荒川流域である。また、下毛野・那須、常陸北部、三浦半島、南武蔵の東京低地(古利根川・渡良瀬川が形成した武蔵と下総の間にある湾岸低地)にもS字甕がみられる。特に上毛野の低地部では、東海西部系土器が様式的に完備した形で定着し、在地化を遂げる。墓制が東海起源の前方後方墳に転換し、東海西部系の木器様式、排水溝をめぐらした低地性住居(平地建物)も出現する。東海色は布留1式並行期まで継続し、故地との情報交流が継続しているが、その段階の葬送用器物として顕著なのが、東海でも伊勢地方に多い伊勢型二重口縁壺 [図4, 田口 1981] の採用である。また③地域では、後述するように東海西部系様式を保持する集団の外縁地帯(山麓や山間部)に、一時的に在来弥生系土器を保持した集団が併存し、次第に同化していく [若狭 1990]。以上のような諸属性から、この地に東海西部を主体とする外來集団が組織的に移入したことは疑い

なからう。

なかでも、典型的な「伊勢型二重口縁壺」が葬送儀礼に用いられた上毛野西部に移入した集団は、主に伊勢地方に起源する可能性が考えられる。ただし、上毛野から東に離れると、次第にS字甕・伊勢型二重口縁壺が薄れ、普通口縁のハケ整形台付甕やナデ整形平底甕、久ヶ原系壺などが混在する。そこでの集団構成は、大宮台地や上総の在来系集団を核に、各地の外来系集団を混成したものとみられる。

河川交通の確立

遺跡の分布からみた東海西部系集団の移入ルートは、太平洋岸の外洋を経由した後に、三浦半島を経由して東京湾から東京低地に入り、現荒川筋を遡上、大宮台地北部から現利根川流路を経つ、北武蔵と上毛野において利根川両岸に展開したとみられる〔田口2000〕。S字甕などの分布からは、この時期の利根川の主流路は、現在の荒川や元荒川の流路と接続しながら東京湾に流下していた可能性が高い〔橋本・平野2006〕。埼玉県熊谷市小敷田遺跡では、古墳前期の流路から準構造船の部材が検出されており、のちに「万葉集」東歌に歌われた「埼玉の津」を連想させる船の運用と津の存在が示唆される（図2）。また、前橋市元総社明神遺跡などからも古墳前期の舟形木製品が知られており、水上交通にかかわる祭祀の存在を教える。

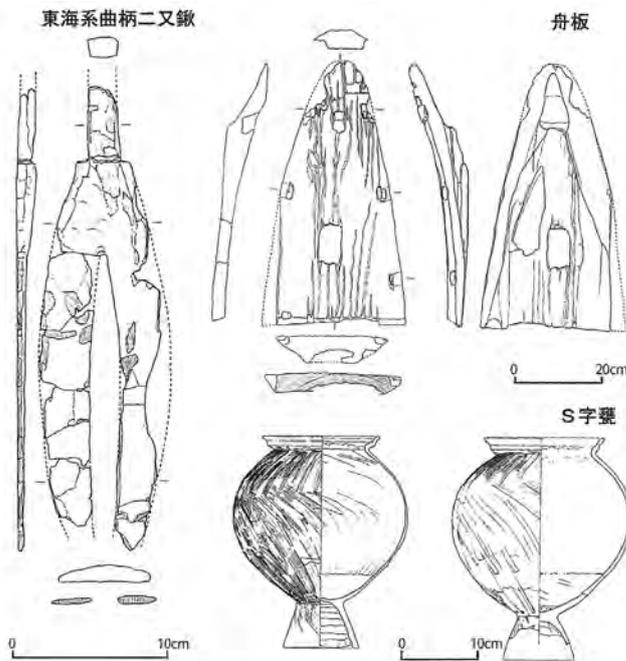


図2 小敷田遺跡5区河川跡出土品
(埼玉県埋蔵文化財調査事業団1991『小敷田遺跡』より)

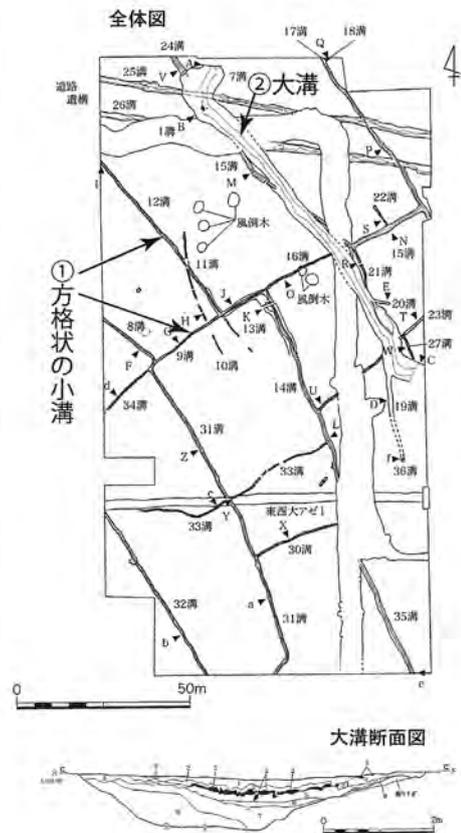


図3 砂町遺跡における低湿地の水田化
(玉村町教育委員会2007に筆者加筆)

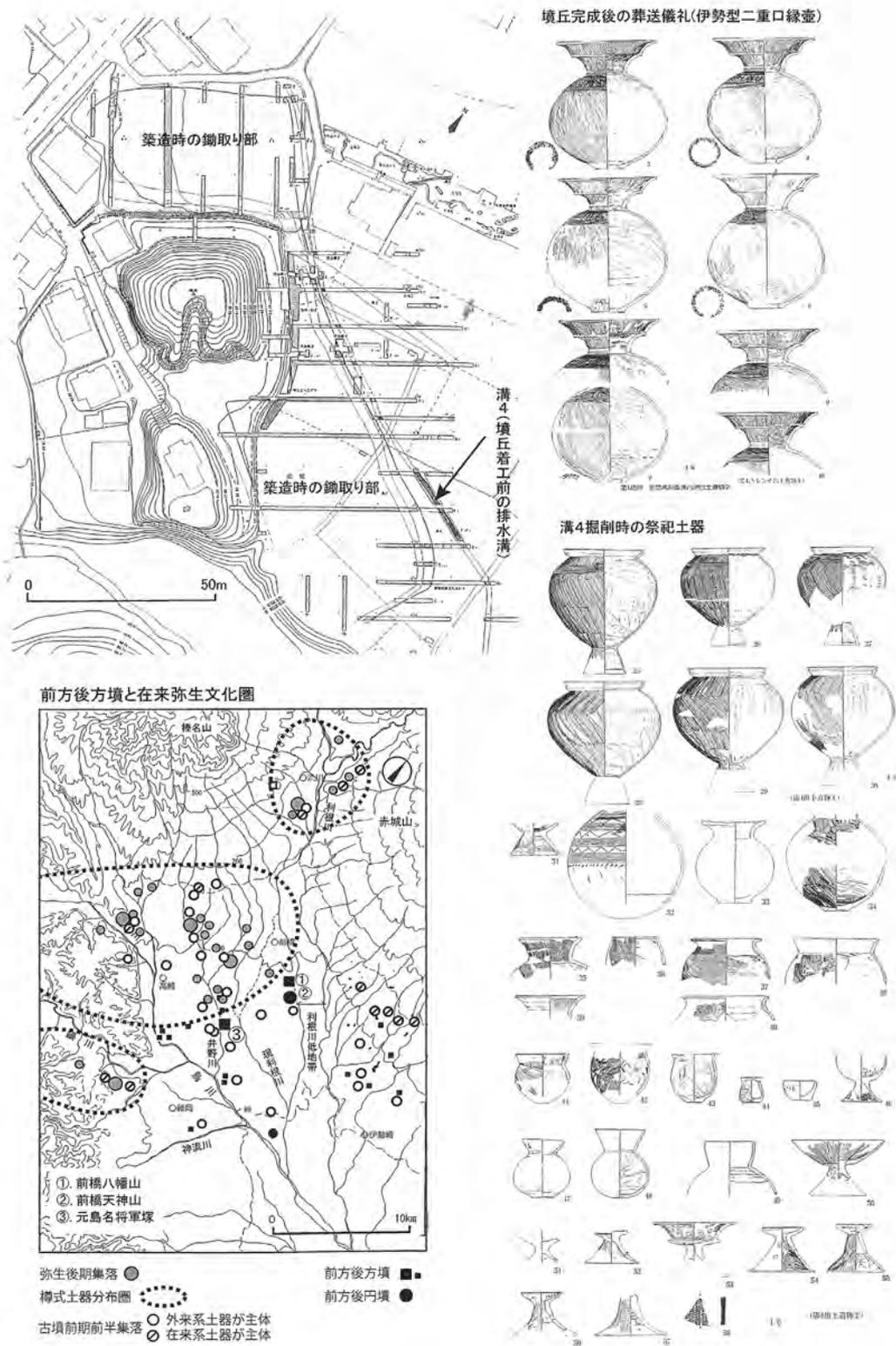


図4 元島名将軍塚古墳の築造と出土遺物, 築造位置
(墳丘図と土器は田口1981より。筆者加筆)

ちなみに、現在の利根川は、千葉県野田市関宿あたりから下総台地を切って東流し、霞ヶ浦沿岸を経た後に銚子にて太平洋に通じている。しかし、今日の利根川の流路は、江戸時代に洪水防止のために東へ瀬替えされ、近代には足尾鉍毒を首都に及ぼさないために大幅に変更された結果であり、江戸時代までは東京湾に流下していたことが知られる〔松戸市立博物館2005〕。また、今は利根川の支流となっている渡良瀬川は、かつては独立河川として太日川（おおいがわ）と呼ばれ、現在の江戸川的位置を流れていた。そして鬼怒川以東の河川が、「常陸川」として巨大な内海の香取海に流れ込み、さらに太平洋に接続していたのである。

北西関東における東海西部系集団の定着

上述のように、古利根川、荒川水系は接続し、東京湾と北西関東内陸部を連絡していた。ここを遡上してきた外来系集団は利根川両岸に展開したが、なかでも中核的な定着地となったのが次の地域である。

- ア. 群馬県西部の利根川北岸・井野川下流（高崎市・玉村町地域）
- イ. 同利根川南岸、鎗川・神流川下流域（藤岡市・埼玉県児玉郡域）
- ウ. 利根川から荒川南岸（埼玉県本庄市・熊谷市）
- エ. 群馬県東部の利根川北岸域（群馬県伊勢崎市・太田市地域）

これらは、いずれも先行する弥生後期集団が不在であった低湿地域である。換言すれば、在来弥生集団が経営不可能であった未開地であるがゆえに外来集団の移入が可能だったのであり、ここに東海地方固有の低湿地開発に適応した技術群が投入されたと考えられる。広大な空閑地を開拓するために、外来の人々は目的的に移入したのである。

なお、ここでは集団定着後の墓制として東海系譜の前方後方墳が成立する。前方後方墳は、前方後方墳秩序の影響を受ける前後で、第Ⅰ群・第Ⅱ群前方後方墳にその歴史的な性格が分かれることが指摘されるが〔中井2004, 田中2011〕、③地域ではⅡ群前方後方墳として大型のものが成立するのが特徴的である（図4・7）。100m級では、ア地域の元島名将軍塚古墳（図4, 95m）、前橋八幡山古墳（130m）、エ地域の藤本観音山古墳（116m）、山王寺大枡塚古墳（96m）を挙げることができ、とりわけ農業経営に成功し、動員力を獲得した地域であったと見られる。

なお、利根川水系以外では、那珂川水系の上流部に大型前方後方墳の集中がある。駒形大塚古墳（64m）からはじまり、前期を通じて前方後方墳を継続し、最終的に下侍塚古墳（84m）、上侍塚古墳（114m）を輩出する那須地域である。

2 低湿地開発と集団再編

低地開発の実態

では、そうした地域力の形成はどのように成し遂げられたのか。

弥生終末から古墳前期初頭に上毛野と信濃の境界に位置する浅間山が噴火したが、この時降下した軽石（浅間C軽石）は北西関東に広く降下した。軽石を挟んでその上下から出土するのは尾張の廻間Ⅱ式新段階の土器であり、畿内の布留Ⅰ式に並行する。

上毛野では、このテフラに被覆された水田・畠跡が広く遺存すると同時に、そのテフラを鋤き込

んで復興（もしくは噴火後に開発）した田畠も検出されている。前者は3世紀後半までに開かれていた耕地、後者は主に3世紀末から4世紀代に拓かれた耕地とすることができる。一帯は、花粉やプラントオパール分析によってもヨシ属の卓越（湿潤環境）から、イネ科の増加（水田経営が本格化）およびタケ亜科の増加（乾燥環境が進行）が確認される場所である。

玉村町砂町遺跡〔玉村町教委2007〕はこうした低湿地の開発プロセスをよく示す遺跡である（図3）。その経過は、①湿地中の樹林を伐開→②小溝（幅1m・深さ50cmほど）を方格状に繋いで滞留水を小河川に排出し、土地の半乾燥を促進→〈浅間山噴火〉→③長大な水路（幅3～10m、深さ1m）を開削して系統的な用水を確保しつつ水田化を推進、の順で、耕地開発を進めている〔若狭2012a〕。大水路はそこから北へ2km上流の前橋市徳丸仲田遺跡でも検出されており、直結しているかは不確定ながら一帯の低湿地に広域水路が開削されたことが明らかである。水路は要所で屈曲し、そこで井堰によって分水している。なお、高崎市新保遺跡では、この時期を中心とする大規模な木器製作痕跡（流路内の未成品の検出）が発見されたが、ここでは東海系鋤〔樋上2010〕の製作が知られ、上記の開発に新たな農具の供給を伴ったことが知られる。

地域開発と首長墓造営の連動

この状況を見ると、移入者による低湿地開発が周到な準備をもって進行したことが明らかである。そのプロセスは、この地域で初めて出現した広域首長墓である元島名将軍塚古墳の築造経過とも整合的である。將軍塚古墳（図4）の築造にあたっては、①古墳施工予定地の外周に溝（幅1m・深さ1m前後）を開削→②溝での祭祀（土器の廃棄）→③溝より内側の土を鋤きとって墳丘を構築→葬送儀礼の執行（伊勢型二重口緑壺で墳頂を圍繞）と推移しており〔田口1981〕、まずは溝の掘削によって滞留水を排出する砂町遺跡の水田開発プロセスと技術的・時間的にも整合している。このことから、移入集団は当初から首長に統括されており、その首長墓の造営準備行為は水田開発準備と連動し、土器を献納する祭祀（集団意識の結集行為）を伴いながら進行したことが判明する。すなわち、古墳造営が、新開地での開発推進と連動する「象徴行動」であることが確認できよう。

なお本古墳は、弥生後期の樽式土器を保持する在来集団の「伝統的居住域」と古墳時代外来集団による「新開地域」の境界地に築造されており、記念物としてきわめて意図的な選地が行われ、外来集団と在来集団の統合のシンボルとしても機能したと考えられる（図4左下の囲み図を参照）。

往時の上毛野の低地部には、地域経営をすすめる複数の首長系譜が移入し、上述のように大型前方後方墳の築造を成し遂げているが、これらの集団は、上毛野の広大で安定した低湿地が未利用であるという情報を、弥生後期の情報ネットワークのなかで獲得し、ここを経営する目的で大挙して移住したと考えられる。上毛野の開発が急速に進められ、東日本でも突出した古墳文化を創出していく理由は、当初から低湿地利用を核とした地域経営システムが完成された形で扶植され、かつ集団編成が多面的であったことに由来したのである。

手工業の掌握と首長

ところで北武蔵では、近年注目すべき遺跡が発見されている。東松山市反町遺跡〔赤熊他2011、福田2012〕がそれで、荒川南岸の低地に営まれた集落跡からは、吉ヶ谷式系、東海西部・東海東部系、

畿内系、北陸系土器とともに、ガラス玉の製作を証明する土製鋳型や、水晶・緑色凝灰岩・瑪瑙を用いた玉造りの痕跡が確認されており、遺跡内では河川跡と堰も検出された。この遺跡から見上げた河岸段丘上にある高坂古墳群からは埼玉県で初めてとなる舶載三角縁神獣鏡が出土しており、一帯に交流拠点・技術拠点が形成されていたことが知られる。上毛野でも、高崎市下佐野遺跡群などで滑石や緑色凝灰岩を用いた玉造遺跡が確認されており、古墳前期の先進集団が低湿地農業ソフトウェアとともに、玉生産に代表される手工業ツールを具有していたことが明らかである。

反町遺跡は荒川南岸低地に構築されているが、1.5km 北方の荒川北岸松山台地には、北武蔵で最初の大型前方後円墳の野本将軍塚古墳（115m）が存在している。本古墳の時期には諸説あって、中期前半説が有力であるが、未発達な前方部形状や埴輪の未確認から前期古墳の可能性も高い。古墳膝下にある五領遺跡は布留式土器を多量に出土しており、このエリアの畿内との交流の濃厚さを教えている。反町遺跡の手工業者や治水技術者の存在からも、野本将軍塚古墳の被葬者は、荒川水運による東西交通を抑えた北武蔵の前期首長であった可能性も考えておきたい [坂本 2015]。

在来弥生系集団の再編成

上毛野の低地に定着した外来系集団は、低湿地背後の山麓部や山間部に居住する在来弥生系集団（上毛野西部・樽式）と居住域を接していた。土器様式の変質速度からみると、最も外来系集団の圧力が強かった上毛野西部平野部周辺では、樽式土器は急速に解体し、在来弥生系（樽系）集団は外来系集団に速やかに取り込まれた [若狭 1990]。

こうした中で、興味深いのは上毛野西縁部の鎭川流域の動向である。鎭川は上毛野西端部の甘楽郡域を流下し、藤岡市で烏川に合流する。ここは元來樽式土器の分布域であったが、弥生後期後半に東から吉ヶ谷式土器が移入して様式圏の組み換えが起こった。結果、鎭川下流部には吉ヶ谷式が、上流部には樽式が分布するようになる。これは、吉ヶ谷式の本貫地である北武蔵（比企丘陵）一帯

で、反町遺跡の成立に至るような外来集団の交流を原因として集団拡散を促す事象が発生したためだと考えられる（図5）。

吉ヶ谷式はさらに興味深い動きを示す。北武蔵から見て利根川対岸（北岸）の上毛野東部は、もとより在来弥生集団が希薄であり、弥生後期はほぼ無住地であった。しかし古墳前期初頭になると、東海西部系集団の移入とともに吉ヶ谷式の拡散が起こり、上毛野東部利根川沿岸低地には東海西部系集団、背後の赤城山や足尾山地の山麓部には吉ヶ谷系集団（群馬側の吉ヶ谷式を赤井戸式と呼ぶ研究者もある）という住み分けが発生したのである [若狭 1990, 深沢 2015]。同時に、赤城山南麓には上毛野西部から樽系集団や、信濃を經由

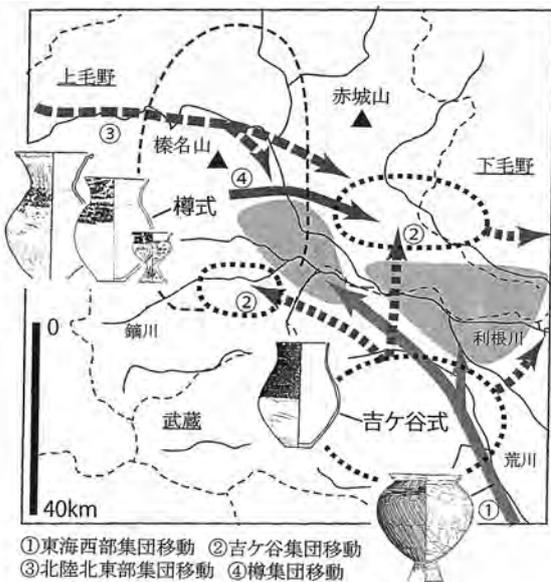


図5 在来集団と外来集団の再編

この段階の社会形成の核が低地部に置かれていたことをよく示している。

上毛野地域では以後、大型前方後方墳・前方後円墳が成立していくが、100mに迫る大型墳の所在地はそのなかでも外来系集団の定着地にほぼ限定されている。開発規模に比した人口圧の大きさが、古墳築造の動員力に直結しているといえる。

以上をまとめれば、関東における古墳前期の開発は、水上交通路の掌握（外来系集団の移入）、外来の農業技術群を投入した組織的な低湿地水田開発、これと連動した象徴的な墳墓造営による集団結集、在来系集団の生業形態に適応した地域再編といった諸様相を考古学的に見出すことができ、これを組み合わせながら急速な社会変化を実現していったのである。

なお東国では、上記したような広大な低湿地とは異なり、農業経営基盤としては狭隘な地（特に海浜部）に前期の大型前方後円墳が築造される例も多い（図6）。たとえば南武蔵の宝来山古墳（100m）など多摩川流域の古墳群や、相模の長柄桜山古墳群（1号墳90m、2号墳88m）などを例示することができる。こうした「海浜型前方後円墳」〔広瀬2015〕の出現は、当然のことながら内陸部の集団動向と連動したものであり、集団移入と東西物流の活発化に伴って、海上交通網の確立や交通・交易拠点（津）の整備が行われたものに他ならない。

②……………中期における共立の歴史的背景

1 共立王の登場

前方後円墳の大型化とその背景

上述のように、上毛野地域における古墳前期の地域経済の進展は、主に低湿地の水田耕作の拡大によって成し遂げられていったが、砂町遺跡の事例に代表されるように、その耕地整備は、滞留水を除去する排水措置の実施と、用水の安定管理に資する給水路の整備の両面によって保障されていた。このため、当地域の政治経済圏は、基本的には河川水系に依拠していたことが明らかである。また、地域開発はそれを主導する首長の墳墓の造営とも連動していたとみられたが、河川水系単位の経済力・動員力で成し遂げられる古墳の規模は、上毛野では前橋八幡山古墳（130m）、前橋天神山古墳（129m）にみる墳長130m級が最大であり、また限界であった（図7）。

しかし、前期後半になると墳長172mの高崎市浅間山古墳、同165mの太田市別所茶臼山古墳のように、それまでの限界を超えた大型古墳（いずれも前方後円墳集成4期）が登場した。これらは、水系経済圏を越えた複数領域の集団が共立した大首長の墓と考えられる。その成立にあたって、筆者はいくつかの要因を考えている。

一つはそれまでの用水圏をさらに結合した広域用水圏の成立である。別所茶臼山古墳の成立はまさにそれにあたと考えられる。茶臼山古墳の立地は、赤城山東南麓の大間々扇状地南端に発する水源を押さえており、上毛野東部の広域用水網を整備し、諸首長間の利害を調停した大首長＝共立王〔土生田2008〕の登場を教えている。同古墳膝下の水源地には、導水路を備えた中溝・深町遺跡〔福島2000〕が成立し、ここに首長の居所が置かれるとともに、石敷井戸や貯水池を配備した水の祭祀場、方形溝をめぐらした大型倉庫が装備され、大首長の政治・経済・祭祀拠点（いわゆる首長居館）

が象徴化、可視化されている [若狭 2011a: 図8]。

ちなみにこの水源地帯は、鎌倉時代に勢力を伸張させた新田氏（後に鎌倉幕府を倒す新田義貞を輩出する）が、新田庄の耕地開発を推し進めるために掌握したものと同じであり、古墳時代以来、一帯の広域農業水利の根幹を成してきた。ただし、弥生時代にはほとんど利用されておらず、古墳時代前期の外来系低地開発技術を伴って初めて運用可能な資源であったことを教えている。

なお、別所茶白山古墳の成立背景となった治水体系と水祭祀は、このころに倭王権中枢で広く採用されたもので、三重県城之越遺跡などの湧水祭祀や、奈良県南郷大東遺跡などにみる導水祭祀場の出現、奈良県赤土山古墳などに採用される導水祭祀施設形埴輪の登場などからみて、4世紀後半を嚆矢としている。上毛野の勢力も、こうした新しい治水技術を伴った農業技術体系をいち早く導入したことが明らかであり、水利支配方式の革新が列島全域で共立王の登場背景を準備したと考えられる。

さらに二つ目として、地域交通網や物流システムの掌握があげられる。これは既に指摘したところであるが、海浜部だけではなく内陸河川の津の掌握も進展したと考えられる。浅間山古墳は東京湾に通ずる利根川水系の上流に位置する鳥川の沿岸に成立している。こ

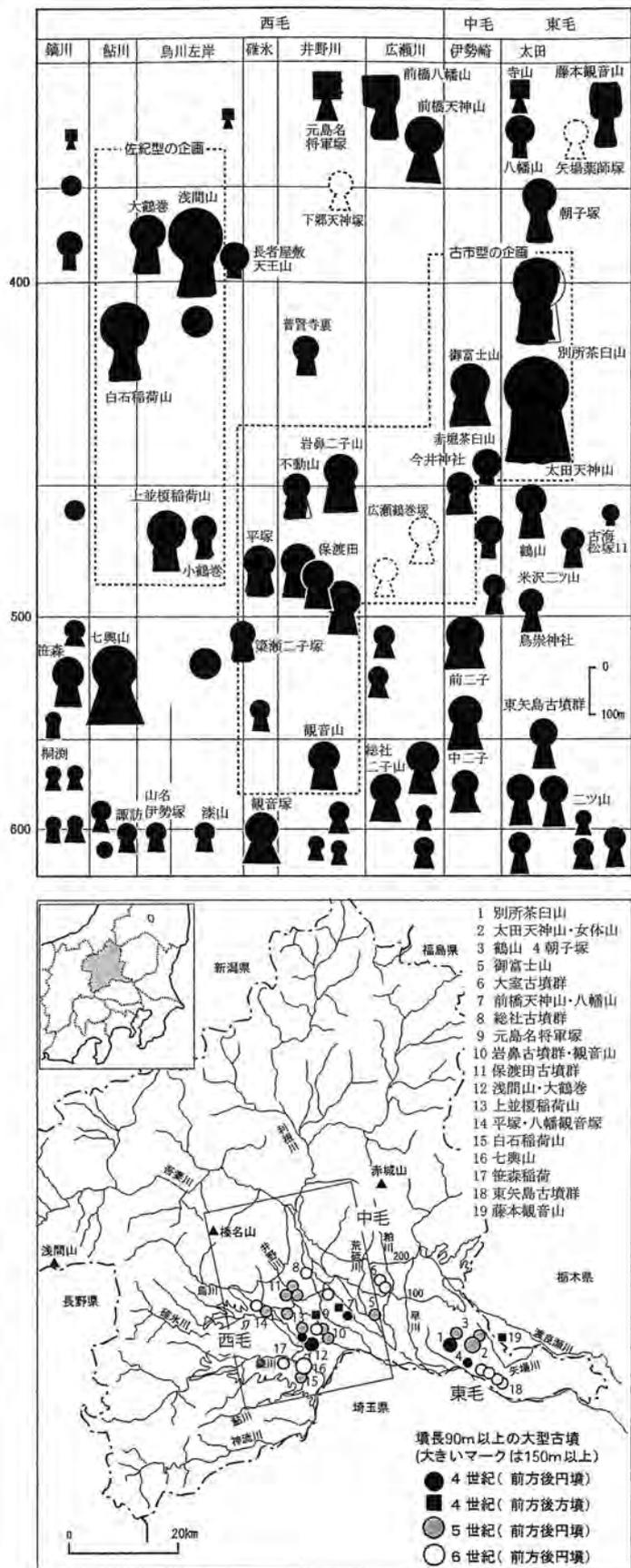


図7 上毛野における主要前方後円墳・前方後方墳

こは、信濃への玄関口である碓氷川や鎭川の合流地にあっており、一帯は畿内の布留式系土器が上毛野エリアでもっとも集中している〔坂口2010〕。このことから、当地点が河川を利用した交流拠点であったことが示唆される(図6)。本古墳の近接地には、江戸時代に倉賀野河岸(江戸まで物資を送る利根川水運最上流域の大規模な津)が成立しており、歴史的に河川交通の要衝であることは重要である。

また、浅間山古墳の墳形は大和の大王陵の一つと目される佐紀陵山古墳の5分の4の相似墳であり(図9)、築造段階では東日本最大の前方後円墳であった。このことから、佐紀の王権と結び、物流の監督権を掌握する上毛野西部の大首長墓とみることが許されよう〔若狭2011a〕。こうしたことから、古墳時代前半期の前方後円墳の背景に「市」の成立と「市司」のような存在を想定する意見は傾聴される〔北條2013・2015〕。

以上の2点から、上毛野における前期後半の大首長の登場は、広域農業水利の掌握と、広域物流監督権の掌握が最大の要因であったと推測することができよう。

最大墓の成立と対外関係

ところで、これら大型二墳に後続して登場したのが太田天神山古墳(墳長210m, 集成5期)である(図7・9)。古墳時代を通じて東日本最大であり、なおかつ東日本で唯一墳長200mを超えた巨大前方後円墳である。河内の古市古墳群の津堂城山古墳(209m)・墓山古墳(208m)・誉田御廟山古墳(425m)などに近い墳形規格を採用し、地方ではきわめて希少な典型的な長持形石棺を具備した本古墳は、古市エリアに墓域を設けた倭王権と密接に連携した同盟勢力であったと評価される〔白石・杉山・車崎1984〕。その時期は、およそ誉田御廟山古墳との並行期〔加藤2008〕を下限とし、須恵器TK73型式前後として把握するのが通説となっている。

本古墳は、それまで利根川の東西の上毛野に成立していた墳長160~170mの二墳の勢力圏を統合した存在である〔右島1990〕。よって、その成立にあたっては広域農業用水圏や市の監督といった前代までの経済圏をさらに超越した、もっと大きな歴史的契機を考える必要がある。

そのヒントとなるのが、太田天神山古墳より以



図8 東毛の前・中期古墳の分布と中溝深町遺跡

後に生起する、上毛野への渡来文化・渡来技術の導入と、それによって生起する様々な技術群の存在である。結論を先に述べると、太田天神山古墳の成立は、これ以前の地域内事情を超越した「東アジア世界との交渉」がもたらしたものであると考える。倭王権の一翼を担った上毛野勢力が対外活動のために結集するに当たって、それまでの経済圏を越えて、「外交・軍事指揮者」を共立したのがその歴史的背景であったと考えたい〔若狭 2017〕。上毛野全域の集団は、外来文化という果実を手にするために大団結したのである。その結果として5世紀中葉以降の上毛野地域に現出したのが、後述するような「渡来人と多様な技術群」であった〔若狭 2011b, 亀田修一 2012〕。

『日本書紀』神功～仁徳紀には、上毛野氏祖による朝鮮半島での度重なる軍事・外交活動（荒田別・鹿我別の新羅征討〔神功 49 年〕、荒田別・巫別による百済からの王仁の招聘〔応神 15 年〕、竹葉瀬・田道による新羅征討と四邑民の連れ帰り〔仁徳 53〕）が記されているが、この文献上の記述と、実際の上毛野地域で確認される考古学的事実（渡来文物の多出）との間には、整合する部分が認められる。したがって、『日本書紀』の記事には5世紀の地域史の実態が埋め込まれていると考えられる〔若狭 2015〕。

共立の解体と諸勢力の並存

しかし、太田天神山古墳を最後にして200m超の前方後円墳は東国のいずこにも出現しない。以後、三河地域以北で最大なのは6世紀前半の七輿山古墳となるが、その墳長は146mにとどまる。

なお、両古墳に時間的に挟まれた5世紀中葉～後半（集成6期～8期）の上毛野の最大規模墳は、高崎市上並榎稲荷山古墳の120mであり、大きく縮小している。しかしながら注目されるのは、この時期に、80～100m規模の前方後円墳が上毛野西部一帯に林立することである（図7）。その数は10基内外に及び、集成7・8期並行の倭のなかでも特筆すべき大型墳の集中現象となっている。このように共立の解消後は、元のとおり水系毎に前方後円墳が複数並存するようになるが、本来これこそが常態とみるべきなのであり、共立という社会様態は、上述のような対外交渉に絡んだ臨時的な歴史現象と捉えるべきである。

この時期、複数の水系に前方後円墳が併存し、三ツ寺I遺跡や北谷遺跡のような治水技術と水辺祭祀を組み合わせた思想で設計されたそれぞれの首長居館を核として、各首長が水源地の掌握を行った様相が判明している

〔若狭 2007〕。上毛野西部の遺跡動態をみると、居館のみならず、既存の集落域や墓域といった社会中心も山麓部の湧水地帯に移動しており、地域首長によって新たな地域開発のための施策が強く推進されたことをうかがわせる（図11）。三ツ寺I遺跡の築造に渡来系の

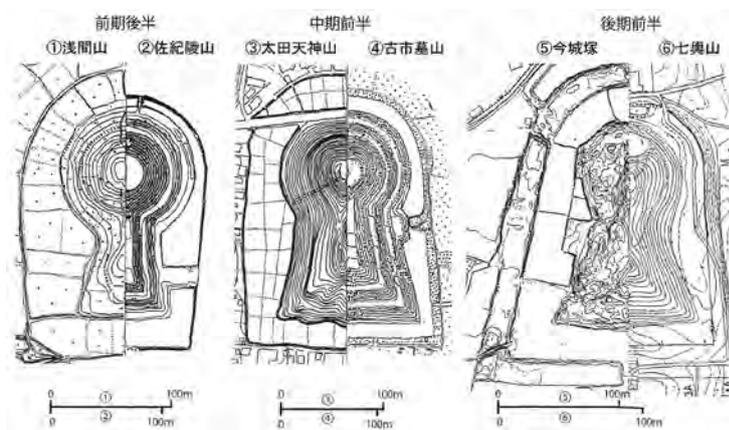


図9 上毛野とヤマトの前方後円墳の相似

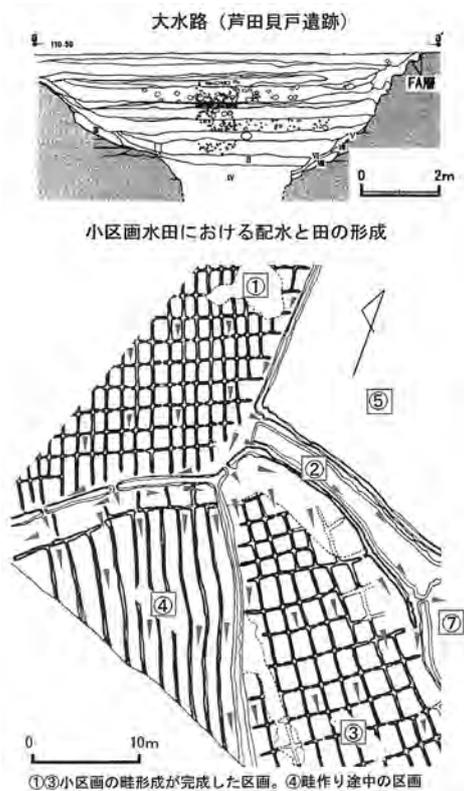


図10 中期の小区画水田と大水路
〔御布呂遺跡〕〔芦田貝戸遺跡II〕高崎市教委を筆者改変

敷粗朶工法が採用されていることから、渡来系治水技術（農業土木技術）の獲得がその背景になったと考えられるところである。

掌握された水源からの用水はよく管理され、農業経済圏の拡大や集約化に運用された。このころ噴出した榛名山の火山灰（Hr-FA）やこの噴火後に発生した泥流の下からは、幅10m、深さ4mに達する直線大水路（芦田貝戸遺跡）、小規模な畔区画の水田（極小区画水田）を接続した広大な水田地帯が検出されており、周到的な用水運用によって水稻耕作地を極限まで押し広げる政策がとられている（図10）。また、乾燥地には広大な畑作地が展開していることも火山灰の下での調査で明らかとなっており、多角的な農業経営の実施を証明している。

加えて、鉄器生産の開始、須恵器生産の試行、拠点埴輪窯の成立、石棺製作、石製模造品の生産、馬生産の開始など、複合的な手工業の創始も確認されており、なかでも馬生産の展開は、農業生産とともに当地の特筆される産業として重要視される。

2 中期型経営の実像

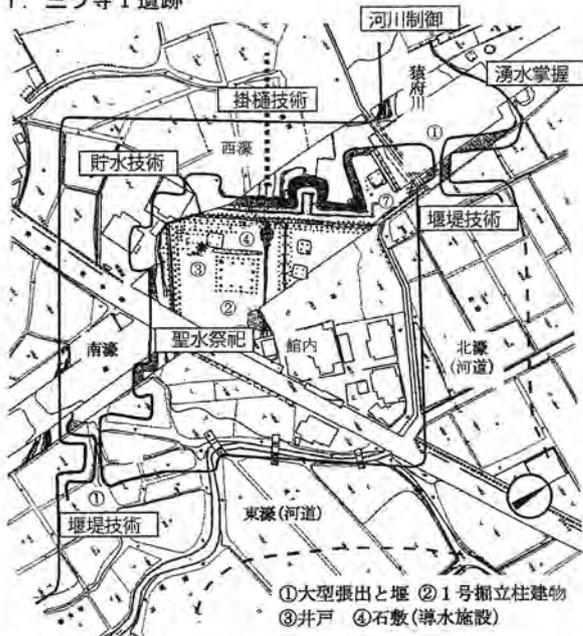
パッケージ化された地域経営手法

遺跡動態からみると、当地域における地域経営の手段は、上述のように①水利と農業、②手工業生産、に2大別される。なかでも中核となるのは①であり、（ア）水源地掌握、（イ）治水技術を投入した首長居館の造営、（ウ）居館を核とした広域水利網の建設、（エ）極小区画水田による用水運用体系が、一連となって展開している。また、こうした技術群や構造物（ハードウェア）に加え、（オ）広域用水下の集団調整や意識結集のための施設（湧水・導水祭祀遺構）が存在し、そこで執行される祭祀や儀礼（ソフトウェア）が複合されているのである〔若狭2007〕。いわば、ハードウェア・ソフトウェアがパッケージされた技術的・知的体系が当地域に導入され、隣り合った水系において、三ツ寺I遺跡、北谷遺跡という同規格の首長居館を核として実践されていたのである（図11）。

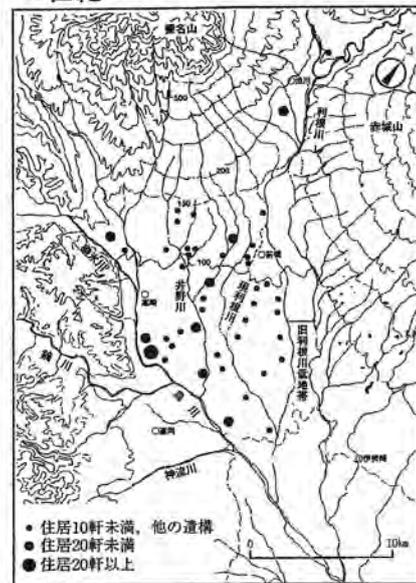
なお、②は、三ツ寺I遺跡・甘楽町甘楽条里遺跡・富岡市上丹生屋敷山遺跡などにみる鉄器生産、藤岡市や高崎市の丘陵部で創始された須恵器・埴輪の窯業生産や石棺生産、高崎市剣崎長瀬西遺跡・甘楽町西大山1号墳の馬埋葬穴などから推定される馬生産などであり、やはりこれらが複合的に導入、実践されていたのである〔亀田2012〕。

水利開発に関しては、『日本書紀』の応神・仁徳紀に池溝構築伝承が集中するが、実際は推古朝の施策を遡上して記載したものとする文献史学の主張〔館野1978〕が知られている。また、古市大溝が7世紀に開削されたとする考古学側の成果〔広瀬1983〕もあわせて、7世紀を水利革新の世紀

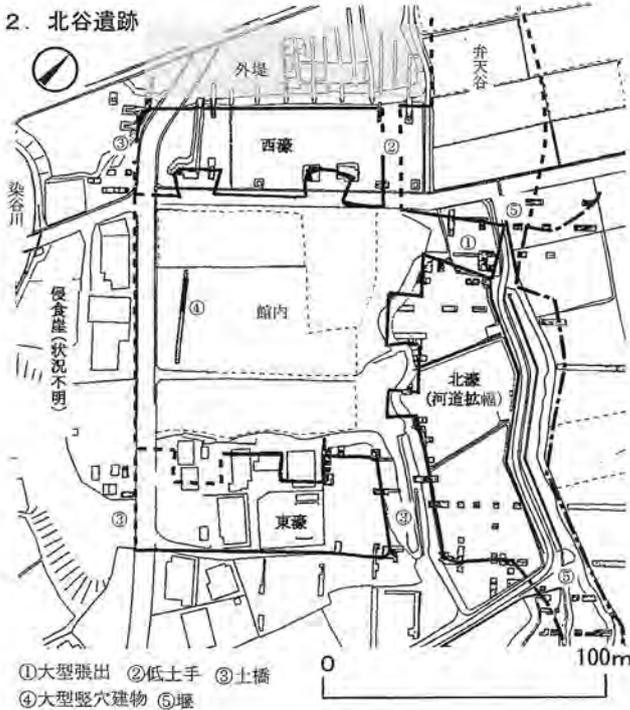
1. 三ツ寺 I 遺跡



4 世紀



2. 北谷遺跡



5 世紀後半



群馬県教委 1988『三ツ寺 I 遺跡』, 群馬町教委 2005『北谷遺跡』に筆者加筆

図 11 中期後半の集落移動と首長居館

として評価する傾向が強い。それは正鵠を射ているが、筆者は上述のような上毛野の考古学的実態から、5世紀にも大きな水利経営の画期があったと考えている〔若狭2012b〕。近年では、河内や出雲のケーススタディーからも5世紀の開発論が再評価されており〔菱田2014、池淵2015〕、列島の主要首長間に敷衍された古墳時代中期のパッケージ化された地域経営手法の存在が傍証される。

首長連合と秩序の形成

榛名山東南麓の5世紀後半においては、三ツ寺I遺跡・北谷遺跡膝下の2つのエリアを含め、水利や地勢から最低でも4つの前方後円墳系列が確認できる(図7)。そこでは、墳長80mから120mまでの前方後円墳が築造され、三ツ寺I遺跡の主が埋葬された高崎市保渡田古墳群を首班とした緩やかな連合関係が形成されていた。連合内部の秩序は、墳墓に備わった複数の器物の属性によって表象されていた(図12)〔若狭2015〕。

まず一つは、高崎市南部産の凝灰岩製舟形石棺の共有によって首長間(前方後円墳～大型円墳)の連合関係が可視化され、そのなかでは棺の縄掛突起の数と寸法の大小によって秩序が形成されていたことである。突起は短辺2個、長辺2個の2-2型式が最上となり、同じ時期に畿内で成立していた長持形石棺の秩序とも連動する〔石橋2013〕。その枠組みのさらに外側には、石棺保有の有無による決定的なポジションの差が存在している。これは、首長内部機構の差異を表出しており、石棺を保有するのは独立首長、しないのは首長配下の属僚という関係性が表示されている。

加えて埴輪秩序がある。円筒埴輪の寸法ならびに突帯の条数、古墳への樹立数(供給数)による差別化であり、3条突帯以上が独立首長墓、2条突帯が属僚墓へ供給されている。これは、先の石棺秩序に概ね合致する。5条以上の多条突帯で規格が高さ80cmに近い埴輪は井出二子山古墳など限られた上位前方後円墳のみの装備であり、倭王権との関係によって特別に許された規格とみるべ

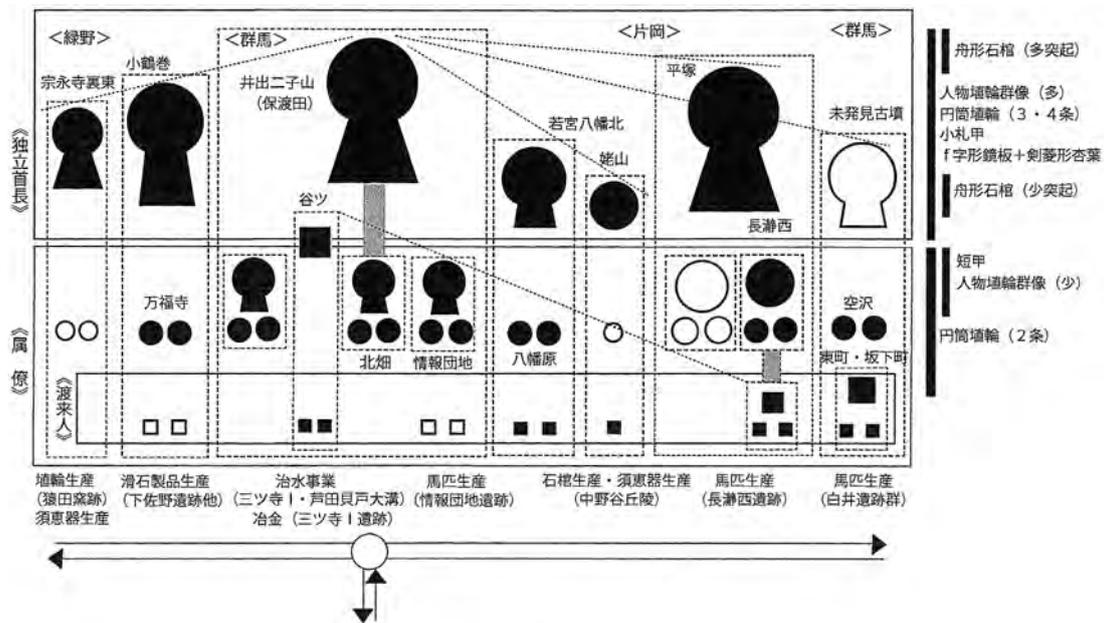


図12 上毛野における5世紀後半の秩序形成

きであろう [山田 2008]。この秩序形成は、在地埴輪生産が藤岡市域などの粘土資源の含有地において拠点生産化され、供給がコントロールされたことに起因するものであり、開窯を主導した首長によって埴輪の供給にかかわる秩序が形成されたと考えられる。

なお上毛野西部では、須恵器に関しても、窯は未発見ながら TK23・47 型式段階で在地生産の開始が確認される [藤野 2007]。当地域の高耐火粘土の含有地質の分布は高崎市南部・藤岡市西部・安中市の丘陵地に集中しており、この段階で、首長による粘土資源の探査と掌握がなされたことが確実である。これは埴輪生産とも連動性を有する。

埴輪・須恵器の窯業生産は、同じ首長の膝下で一体的に形成されたのであり、その推進者は保渡田古墳群の初代にあたる井出二子山古墳の被葬者であったと考えられる。なぜなら、この古墳では藤岡産 5 条突帯円筒埴輪、2-2 突起型式舟形石棺、当地最古の人物埴輪群像、在地産須恵器祭祀、の組み合わせが確認できるからである。

さらに重要なのは、井出二子山古墳こそが時期的にも首長居館三ツ寺 I 遺跡の設置者に比定されることである。ここに、雄略期に倭王権と結んで対外交流にも加わり、渡来人を膝下に編成したうえで、居館を核にした技術複合や祭式を導入し、その共有をもとに上毛野西部の首長連合体を主導していた、新たな地域経営者像（東国首長像）が描けるのである。膝下の緩やかな連合体は、いわば利益共同体でもあり、のちに『日本書紀』に描かれる枝族の多い「上毛野氏」の原型となるものであろう。

渡来技術の定着と地域経営

上に述べた技術群の上毛野における登場時期を須恵器型式で照合すると、鉄器生産が TK216 型式（富岡市上丹生屋敷山遺跡の羽口・鉄鋌など）、舟形石棺の量産開始が ON46・TK208 型式（岩鼻二子山古墳、不動山古墳）、窯業生産が TK23・47 型式（藤岡猿田埴輪窯、井出二子山古墳出土須恵器）、三ツ寺 I 遺跡型居館が TK23 型式期となり、5 世紀中葉前後が画期となる。連動して登場する渡来系の考古資料は韓式系軟質土器と方形積石塚、馬関係資料であり、多くは榛名山北東麓から南麓部に重なって分布するため、渡来人の活用と手工業の展開は、上記の首長連合によって推進されたものであることが分かる（図 13）。

なかでも注目されるのは、馬生産開始の時期の遡上である。これまでは 6 世紀前半の榛名山墳火の噴出物（Hr-FP）に埋没した広大な牧（渋川市白井遺跡群）の存在や、黒井峯遺跡における家畜舎の存在から、6 世紀前半以降の馬の大規模生産が知られていたが、剣

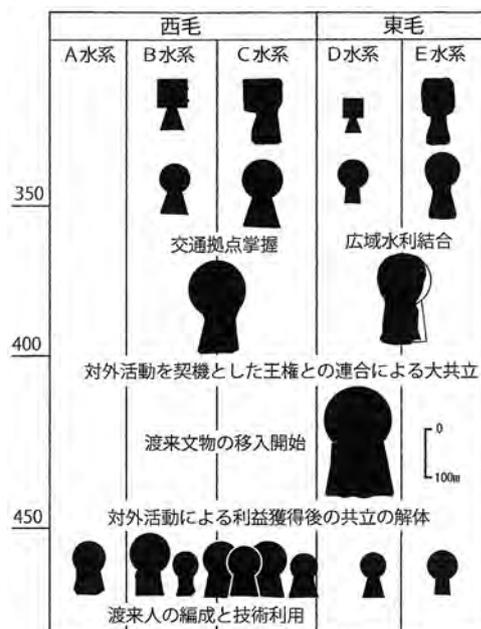


図 13 上毛野における大首長の共立とその解体モデル

崎長瀨西遺跡や西大山1号墳における馬埋葬土坑の発見から、馬生産開始が5世紀中葉に遡上する可能性が高くなった。それは近年発見された金井東裏遺跡（Hr-FAで埋没、5世紀末）における幼齡馬の遺存体や多量の馬蹄跡の確認〔杉山他2014〕からも強く補強される場所である。

以上のように、太田天神山古墳の後、すなわち大共立の分解後には、諸集団によって新来の技術群を背景にした地域振興が一斉に推進された社会状況を読み取ることができる。逆にいえば、外来文物移入という地域欲求のために代表者を押し立てた諸集団は、その目的の達成によって分解したのである（図17）。太田天神山古墳の成立は、こうした地域集団の事情から説明でき、ほぼ同じ時期に最大規模を迎える日本各地の大型・巨大前方後円墳の成立契機の一つは、この論理によって説明できるのではないだろうか。

たとえば、墳長186mと東国第2位の規模を誇る茨城県石岡市舟塚山古墳（5世紀前半）は、常陸の香取海沿岸勢力の共立墓と考えられるが、5世紀後半には行方市三味塚古墳（88m）など複数の前方後円墳系列に分解し、垂飾付耳飾など外来系遺物の保有が確認される。

同じく、房総地方最大の千葉県富津市内裏塚古墳（5世紀中葉、144m）は、東京湾岸勢力の共立墓と考えられるが、その後は市原市姉崎二子塚古墳（114m）、木更津市祇園大塚山古墳（100m）といった複数系列に分解し、墳丘規模が縮小する。内裏塚古墳には朝鮮半島製胡籬が、姉崎二子塚古墳には銀製長鎖式垂飾付耳飾が副葬されるなど半島製品が保有され、集落遺跡においては韓式土器（陶質土器・軟質土器）や鍛冶遺構・馬埋葬遺構・初期カマドなど、渡来技術の受容が進行する。ここでも上毛野と同様に、共立墓の成立を契機として渡来文物の定着が見て取れるのである。なお、祇園大塚山古墳にはきわめて希少な金銅製甲冑が保有されるが、橋本達也は対外進出に伴って王権に信任され、宝器的な甲冑を賜与された武人像を想定している〔橋本2013〕。

このように東国の古墳時代中期の特質は、倭王権との連携による対外活動を契機とした外交・軍事指揮者の共立、対外交流の果実としての渡来文化の移入ならびに新産業の地域への扶植、という2つの歴史的段階性によって説明できよう。

③……………後期の地域経営と屯倉

1 6世紀前半の動向と七輿山古墳

新たな地域動態の発現

これまでに述べてきた古墳時代前期・中期の地域経営は、どちらかといえば開発が拡大していく単系進化の方向性を有していた。前期は、外来系集団と在来系集団の編成を下地とした農耕地の拡大、中期は倭王権との連合と朝鮮半島からの技術移入をベースとして進められた農業水利革新や手工業生産の展開が基軸となって、地域経済が発展する構図となっていた。

しかし、6世紀にその構造は大きく転換することになる。それまで、倭王権は列島の北縁部から南端部までを覆う「前方後円墳を表象とするシステム」で各地の勢力を結合していたが、ヤマト地域を核にした豪族連合体の域を脱していなかった。しかし、前方後円墳が小型化しその秩序・規範・象徴性が崩壊していく6世紀前半からは、従前とは異なる社会システムの成立が示唆されてくる。

本節では、こうした変革期における東国首長の動態についてケーススタディーを提示したい。

6世紀前半の上毛野と七輿山古墳

上述のように、5世紀前半の太田天神山古墳段階で形成された大共立はその後に分解し、上毛野西部では5世紀後半になると100m内外規模の前方後円墳系列が水系を基盤として高密度に並存し、保渡田古墳群を首班とした比較的等質的な首長連合体が形成された。

しかし、6世紀前半にはその様態が変質し、初期横穴式石室を有する前方後円墳〔富岡市一ノ宮4号墳(48m)、安中市築瀬二子塚古墳(80m)、前橋市王山古墳(76m)、同正円寺古墳(70m)、同前二子古墳(102m)など〕が、距離をおいて点在するようになる(図7)〔右島1994〕。このとき注目されるのは、上毛野南西部の甘楽郡域(鐮川流域)にはじめて100m級前方後円墳が登場する点である。これが甘楽町笹森古墳(約100m)で、その狭長で赤彩された横穴式石室は6世紀前半に比定される。5世紀に鉄器生産を軸に手工業が扶植された富岡市・甘楽郡域が、6世紀になって地域力を一段と高めてきたことが明らかである。

まもなく、鐮川が形成した甘楽谷が関東平野に結節する位置に、七輿山古墳(藤岡市)が登場した。墳長146m、二重周濠と外周溝を巡らす東日本最大級の後期前方後円墳である(図14)。近接地には5世紀初頭に墳長140mの白石稲荷山古墳が築造されており、1世紀を経て再びこの地に地域統合勢力の奥津城が築造されたのである。

七輿山古墳の築造時期に関しては5世紀後半説から6世紀後半説まで幅広いが、埴輪の型式学的研究(低位置突帯や貼付口縁の多条突帯埴輪)や人物埴輪の属性(鞆を背負う武人)、周濠出土須恵器(TK10型式)、墳形規格から6世紀前半後葉の築造と考えられる〔志村1992、山田2008、徳江2010〕。前方部のやや発達した墳形は、これ以前の上毛野には存在しない規格である。

七輿山古墳並行期のの上毛野西部には、榛東村高塚古墳(65m)、高崎市八幡二子山古墳(66m)、同上小埴稲荷山古墳(円墳・50m)などが一定の距離をおいて形成され、横穴式石室の規模や石材の大型化が進行する。しかし、これらの古墳の墳丘規模は100mに迫ることはなく、七輿山古墳との差は際立っている。このため、七輿山古墳は6世紀前半期の上毛野西部の首長連合の首班であるとともに、同時期の前方後円墳が不鮮明な群馬郡南部・片岡郡南部・緑野郡・甘楽郡域を母胎として共立された存在であったと推定される。

新たな型式である七輿山古墳の墳形規格についてみてみよう。上毛野地域における画期的な古墳の構築時には、必ず倭王権から最新の墳丘規格を導入したことが知られている(図9・7)。既に述べたように、4世紀後半に東日本最大であった浅間山古墳(墳長172m)は、この時期に大王墓が集中する奈良盆地北部の佐紀古墳群の佐紀陵山古墳(209m)の規格を導入し、続いて5世紀前半に東日本最大を誇った太田天神山古墳(210m)は、大阪平野に巨大古墳を成立させた古市古墳群前半期の規格を採用している。そして、次の七輿山古墳の規格を探索すれば、淀川北岸に構築された大阪府高槻市今城塚古墳(181m)が有力候補となり、その約5分の4で造営されたとみられる〔若狭2011a〕。

なお、今城塚古墳との相似を指摘される重要な古墳に、愛知県名古屋市断夫山古墳(151m)がある(図14)。成立時期も6世紀前半であり、七輿山古墳と双壁をなす東日本最大の後期前方後円墳である。結果的に今城塚古墳・断夫山古墳・七輿山古墳の3古墳の規格は類似することになり、

相互の関係に関心がもたれるのである。今城塚古墳は継体天皇の真陵とする説が定説化しており〔森田2006〕、断夫山古墳は継体の妃を出した尾張氏（尾張連草香）の墓とする考え〔赤塚1989〕が広く支持されている。その奥津城と同型・同規模の墳丘を達成している七輿山古墳の被葬者もまた、継体の王権を支えた東国の重要勢力とみるべきであろう。

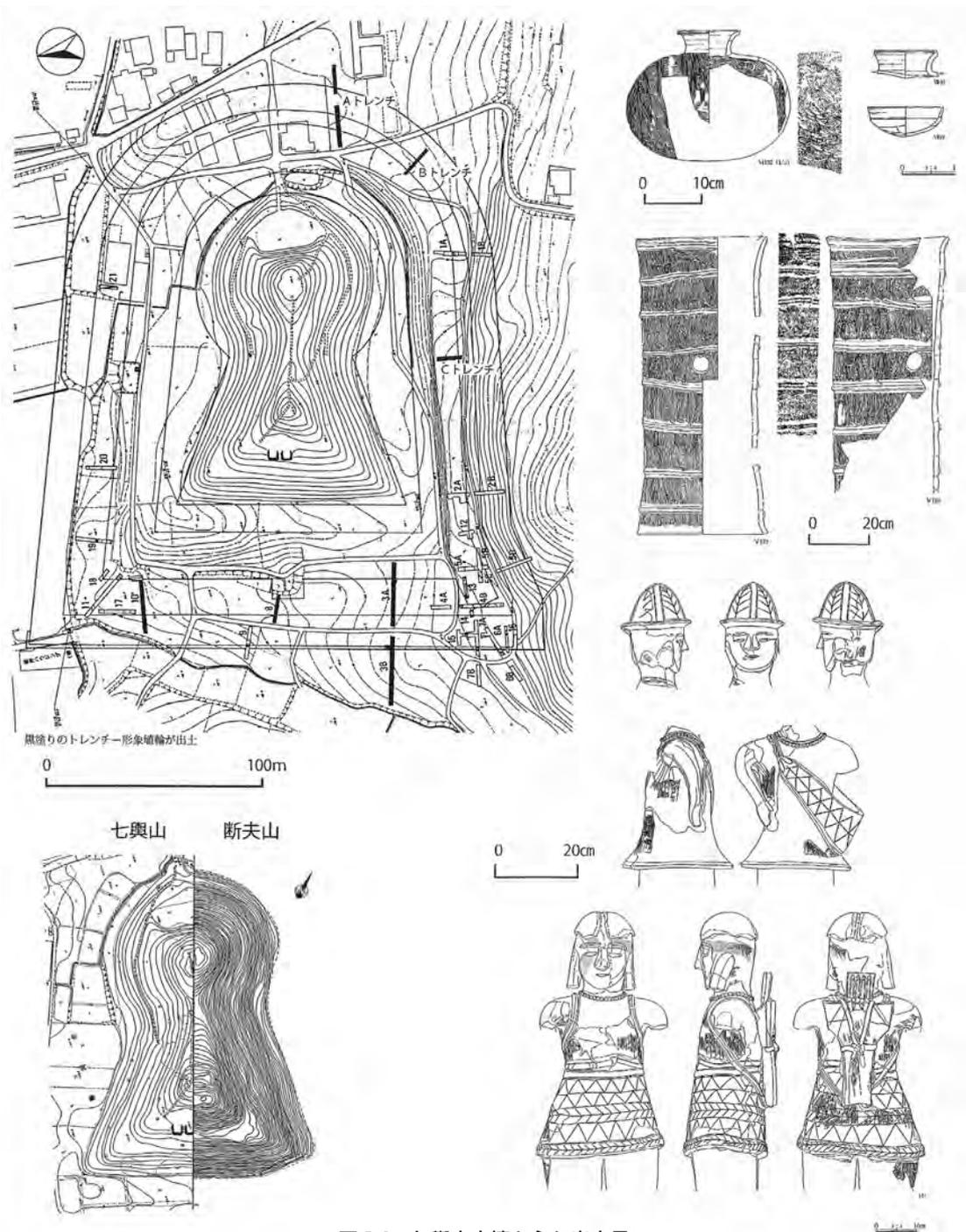


図14 七輿山古墳と主な出土品
(徳江2010, 赤塚1980を筆者改変)

2 6世紀後半の動態

6世紀後半の地域圏と横穴式石室

しかし、七輿山古墳以後これを凌駕するような勢力は二度と登場しなかった。6世紀後半の上毛野西部では前方後円墳の最大規模は墳長100mであり、セカンダリークラスとして60m級を主体として80m級までの前方後円墳が多数成立してくることが特筆される(図7)。また、大型前方後円墳から小型墳にいたるまで横穴式石室が受容されるが、上毛野西部だけでも複数の石室型式があり、その石材選択と構築法からみて次のような大地域圏が設定できる(図15)。

○凝灰岩切石積横穴式石室分布圏：①地域

- a. 烏川東岸(群馬郡南部)……漆山古墳(60m以上)、蔵王塚古墳(円、50m以上)
- b. 烏川西岸・鐺川北岸(片岡郡南部)……山名伊勢塚古墳(75m)、石原稲荷山古墳(円、30m)
- c. 鐺川南岸(緑野郡)……皇子塚古墳(円・31m)、平井地区1号墳(円、24m)
- d. 神流川西岸(緑野郡)……諏訪神社古墳(57m)、諏訪神社北古墳(25m)

○角閃石安山岩削石積横穴式石室分布圏：②地域

- a. 旧利根川南岸(群馬郡中部・那波郡域)……総社二子山古墳(90m)、大屋敷古墳(82m)、山王二子山古墳(56m)、不二山古墳(50m)小泉大塚越3号墳(55m)、小泉長塚古墳(50mか)、浄土山古墳(54mか)など、
- b. 井野川流域(群馬郡東部)……綿貫観音山古墳(96m)、浜尻天王山古墳(約60m)、五霊神社古墳(約50m)
- c. 旧利根川北岸(佐位郡)……安堀古墳(80m)、阿弥陀古墳(45m)など

○自然石乱石積み巨石横穴式石室分布圏：③地域

- ・片岡郡北部・群馬郡北部……八幡観音塚古墳(105m)、金古諏訪神社古墳(円・30m)など。

このように、地勢に応じて特徴的な石材を用いる横穴式石室様式が小地域ごとに分かれているのが特徴的である。

①地域で用いられる軟質凝灰岩や凝灰質砂岩は、片岡・緑野・甘楽地域の新第三紀に形成された丘陵に包含され、5世紀の舟形石棺への利用を嚆矢として活用が始まったものである。なかでも切石手法は、鐺川流域の横穴式石室(富岡市御三社古墳など)に6世紀前半代から採用されていたが、6世紀後半に定式化し、広く上位階層に用いられるようになった[草野2015]。この切石手法は、畿内の切石積石室の嚆矢である岩屋山式石室(7世紀第3四半期)よりも古く位置づく。岩屋山式が硬質の花崗岩を用いるのと比べて、軟質石材の加工という異なる技術系譜に属しており、在地系技術の発展のなかで理解できるものである[白石2003]。

②地域に採用される角閃石安山岩は、6世紀前半の榛名山大噴火の際の噴出物が、土石流として利根川水系に大量に流れ下ったエリアに広く分布している[右島2004]。一帯では河川が土石流に覆われ礫の取得が不可能となったため、河川敷に大量に供給されたこの石材が6世紀後半以降選択されたのである。石材は軟質であり、これを人頭大程度に削り積み上げる。天井石だけは他地域に存在する硬質石材が遠隔運搬されている。軟質の在地石材を切削加工するという点では、①と②は時期的にも連動した現象である。

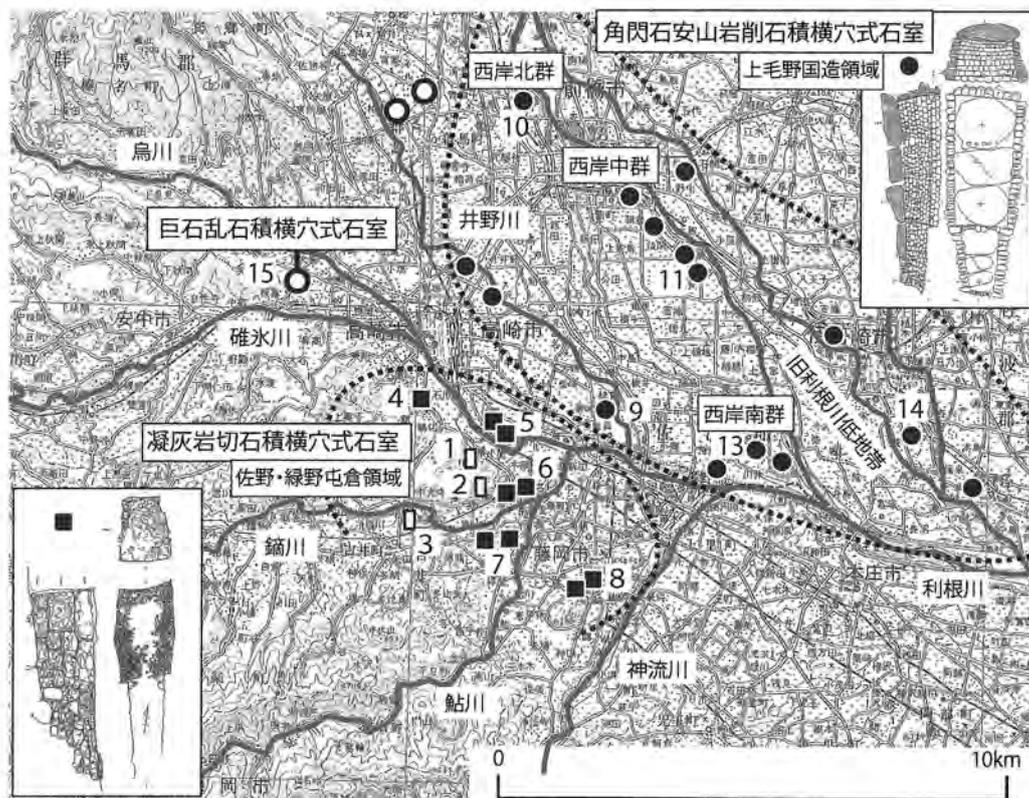
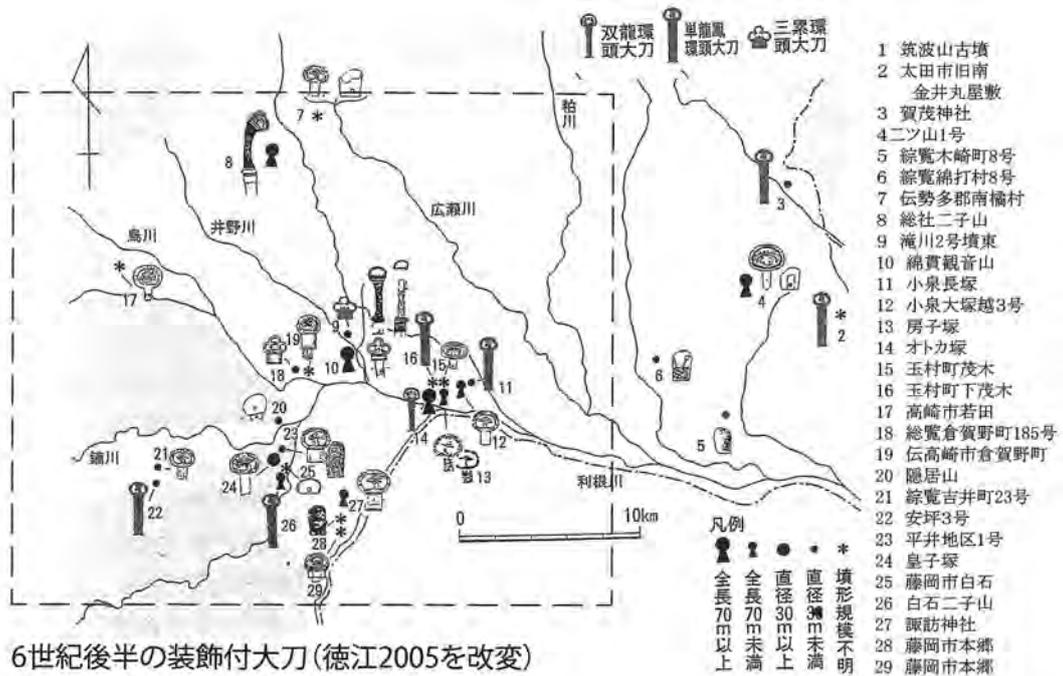


図 15 西毛における後期後半の上位墳の横穴式石室型式(下)と装飾付大刀(上)

なお、③地域の自然石乱石積横穴式石室は広くみられるもので、①・②の分布域にも存在しているが、碓氷川北岸の片岡郡域では八幡観音塚古墳のように巨石石室墳として象徴化されている。つまり、上毛野南西部では凝灰岩切石が、同南東部では角閃石安山岩削石が、それ以外では巨石自然石が上位首長の石室材として採用され、各勢力のアイデンティティになっていたのである。

なかでも角閃石安山岩石材の共有圏（②地域）では、綿貫観音山古墳に各種金銅製馬具や三墨環頭大刀、前橋市山王二子山古墳や小泉大塚越3号墳の出字形立飾冠といった新羅系外来文物の多出が知られ[亀田2012]、その他の副葬品の質量も東国で群を抜いている。よって、この石室型式は、朝鮮半島との関係を有した、上毛野のなかでも最有力の勢力に共有されたとみられる。

この石室の分布域は、7世紀になって大型方墳を上毛野で唯一連続して形成する前橋市総社古墳群の勢力圏と重複しており、8世紀に上野国府や上野国分寺がおかれる群馬郡中枢にあたる。6世紀まで大型前方後円墳が割拠していた上毛野地域は、総社古墳群の成立をもって中心性が色濃く形成されており、これを「上毛野国造」の明確な成立とする意見が一般的である[例えば白石1992、右島2004]。また、土生田純之は、方墳の1代前の最後の前方後円墳を初代国造墓とする⁽¹⁾[土生田2008]。よって、角閃石安山岩削石積石室をもつ大型前方後円墳の造営者は、上毛野国造を含むか、またはその先行勢力と考えることが許されよう。なお文献史学においても、本石室型式の保有者を「上毛野君氏」に比定する意見が出されており、注目される[須永2013]。

七興山古墳解体後の石室型式の多重性

七興山古墳の後の6世紀後半の動向であるが、その膝下のエリアはまさに①の凝灰岩切石積横穴式石室分布圏に該当する。この地域内では有力墳のあり方から上述のa～dの4小地域が認められるが、100m級前方後円墳は存在せず、60m級前方後円墳が最上位、径30m程の中型円墳がセカンダリークラスとして造営されている。七興山古墳共立圏は解体して4系列の優位首長の並存体制に変わったのであり、100m級前方後円墳を複数輩出した②の角閃石安山岩削石積石室のグループより劣位になったと考えられる。

あらためてこの①地域の構造を概観していきたい(図17)。

上毛野西部の基幹河川である烏川が榛名山麓を南流し、これに碓氷川・鎭川・鮎川・神流川が次々に合わさり、やがて利根川に合流する。この一帯は関東平野の最西端にあたり、これより西は丘陵・山岳部に移行する。4小地域のうちa小地域は烏川東岸平野部(旧群馬郡南端部・現高崎市南端部)、b小地域は烏川西岸丘陵部で旧片岡郡南部(後に多胡郡に編入。現高崎市西端部)、c小地域は鎭川南岸丘陵部で緑野郡西部(現藤岡市)、d小地域は神流川西岸平野部で緑野郡東部(現藤岡市)にあたり、神流川の対岸は武蔵国である。

何度か述べているように、この4小地域では上位墓に凝灰岩切石積横穴式石室が採用されるが、近年の調査では小規模円墳にも凝灰岩を使用する例が知られてきた。それだけではなくこの地域では、自然石乱石積み穴式石室や、人頭大の円礫と棒状の小礫をまだらに構成したいわゆる模様積横穴式石室も併存している。この三重構造を分析するため、以下では凝灰岩切石積横穴式石室をA類、自然石乱石積み穴式石室をB類、模様積横穴式石室をC類と呼びたい(図16)。C類は後出的であり、7世紀からは石室平面規格として「胴張プラン」が幅広く採用される。

B・C類の石室を採用するのは円墳が主体だが、B類には前方後円墳も認められる。C類のなかには優勢な円墳（たとえば藤岡市伊勢塚古墳 [28m] や平地神社古墳 [33m]）もみられ、平地神社古墳の石室は玄室長5.3mと、中型前方後円墳のそれを凌駕する。A～C類のなかに明らかに劣勢というものはみられず、A類が上位ではあるものの、それぞれが異なる造墓主体によつたとみることが妥当である。すなわち、この地域に居住する集団系譜が多様であったと考えるべきであろう。C類の様式積み手法は神流川を越えた北武蔵の児玉郡域まで広がり、胴張りの規格は武蔵全域とも共有される。

4つの小地域の古墳動態

続いて、①地域を構成する4小地域の形成過程について論じたい（図17）。

○a小地域

烏川東岸の広大な平野部であり、4世紀前半に中型前方後方墳（40m級）が成立したのち、4世紀後半に当時東日本最大の前方後円墳である浅間山古墳（172m）が築造された。同じ時期には、

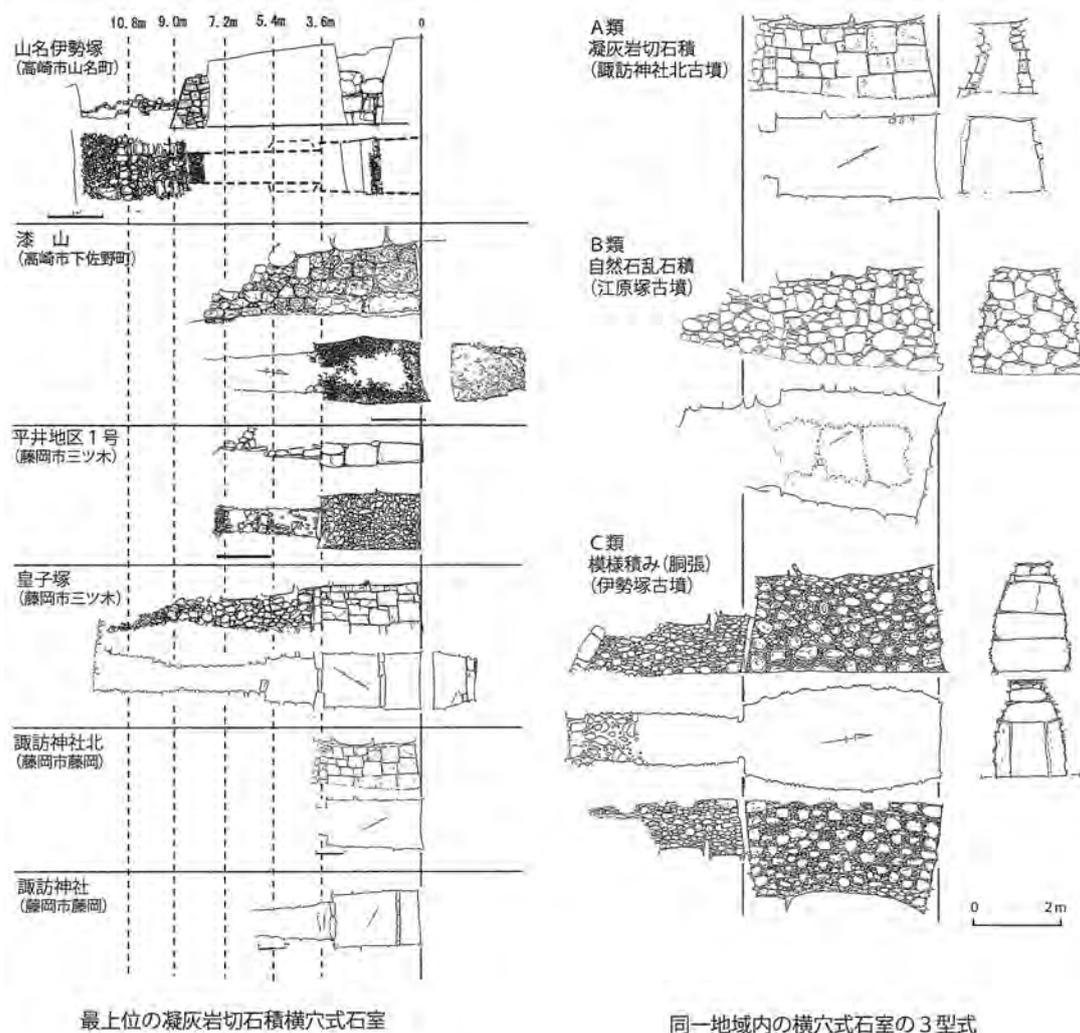


図16 上毛野西南部における横穴式石室の構造と多様性

前方後円墳の大鶴巻古墳（123m）、造出付円墳の長者屋敷天王山（径50m）、円墳の大山古墳（径60m）・茶臼山古墳（径57m）などが築造され、東国で最も濃密に該期の古墳が集中する地域となった。利根川水運上流の津を監督したであろう位置を先にも確認したところである。しかし、5世紀後半には小鶴巻古墳（88m）のクラスに下降し、6世紀前半には顕著な古墳が見られない地域となった。

しかし、6世紀後半にいたると一転して漆山古墳（60m以上）、蔵王塚古墳（円墳44m）、一本杉古墳（円墳25m）などが築造され、地域の復権がなされた。これらにはA類石室が採用される。また重層した古墳にはB・C類石室も確認できる。続く7世紀には、上位墳としては安楽寺古墳（20m・円墳か）が築造され、群馬県地域で唯一の凝灰岩切石製横口式石槨が採用されている。

○b小地域

烏川西岸にあたり、川沿いに狭い平野部が存在するものの、丘陵部（岩野谷丘陵）が大半を占める。5世紀前半に大型円墳の三島塚古墳（50m）が登場し、続いて5世紀後半に舟形石棺を有する中型円墳の姥山古墳（38m）が成立した。しかし、6世紀前半には小型円墳が見られるのみで、a小地域と同様に顕著な古墳がみられない。

加えて、このエリアでは前方後円墳の初出が、6世紀後半の山名伊勢塚古墳まで遅れる。この古墳はA類石室を内蔵する（図16）。この段階にはA類石室をもつ円墳の石原稲荷山古墳（30m）も築かれ、銅鏡や金糸が出土するなど優勢である。なお、山名伊勢塚古墳に隣接する山名古墳群にはB・C類石室を備えた小型円墳が並存している（ただしC類は最も後出する）。

さらに後続する7世紀には、山上古墳、山上西古墳の2基の終末期古墳が築造されている。いずれも山名伊勢塚古墳が構築された平野の背後にあたる丘陵奥部に立地し、谷間の南斜面に構築され、A類石室を備える。切石手法は進化して切組積みが採用され、山上古墳の傍らには、後述するように飛鳥時代の石碑である山上碑が造立されている。この2古墳の立地は北に山を負い、南に水（河川）を有した風水にかなう立地であり、大和飛鳥の終末期古墳の立地と類似する。このようにb小地域では、6世紀後半に前方後円墳が初出し、ここから地域形成が目覚しく進展した。丘陵部は7世紀以降の瓦窯・須恵器窯が営まれ、手工業地域として発達するが、須恵器窯の成立はさらに遡上する可能性が高い。なお、①地域の凝灰岩製石室の材料は本地域の丘陵部に包含されており、多くはここから採取されたものである。

○c小地域

鑄川南岸・鮎川流域の当地域では、初出の大型前方後円墳は中期前半（5世紀初頭）の白石稲荷山古墳（140m）である。畿内Ⅲ期の埴輪様式を受容した古墳で、家形埴輪・短甲形埴輪・円筒埴輪を装備し、並列した2基の礫槨からは石枕や倭製鏡、多数の石製模造品が出土した。鑄川流域下流の統合勢力の墓とみられる。続いて5世紀後半になると、舟形石棺を有する中型前方後円墳（宗永寺裏東塚古墳 [50m]）に下降したが、その後を受けた6世紀前半に出現したのが七輿山古墳であり、ここに二度目のピークを迎える。

6世紀後半になるとこの地域の前方後円墳は再び小型化する。白石二子山古墳（57m）はB類石室を内蔵したと推定され、装飾付大刀や多彩な馬具が出土している。萩原塚古墳は40mの前方後円墳でB類石室を有する。

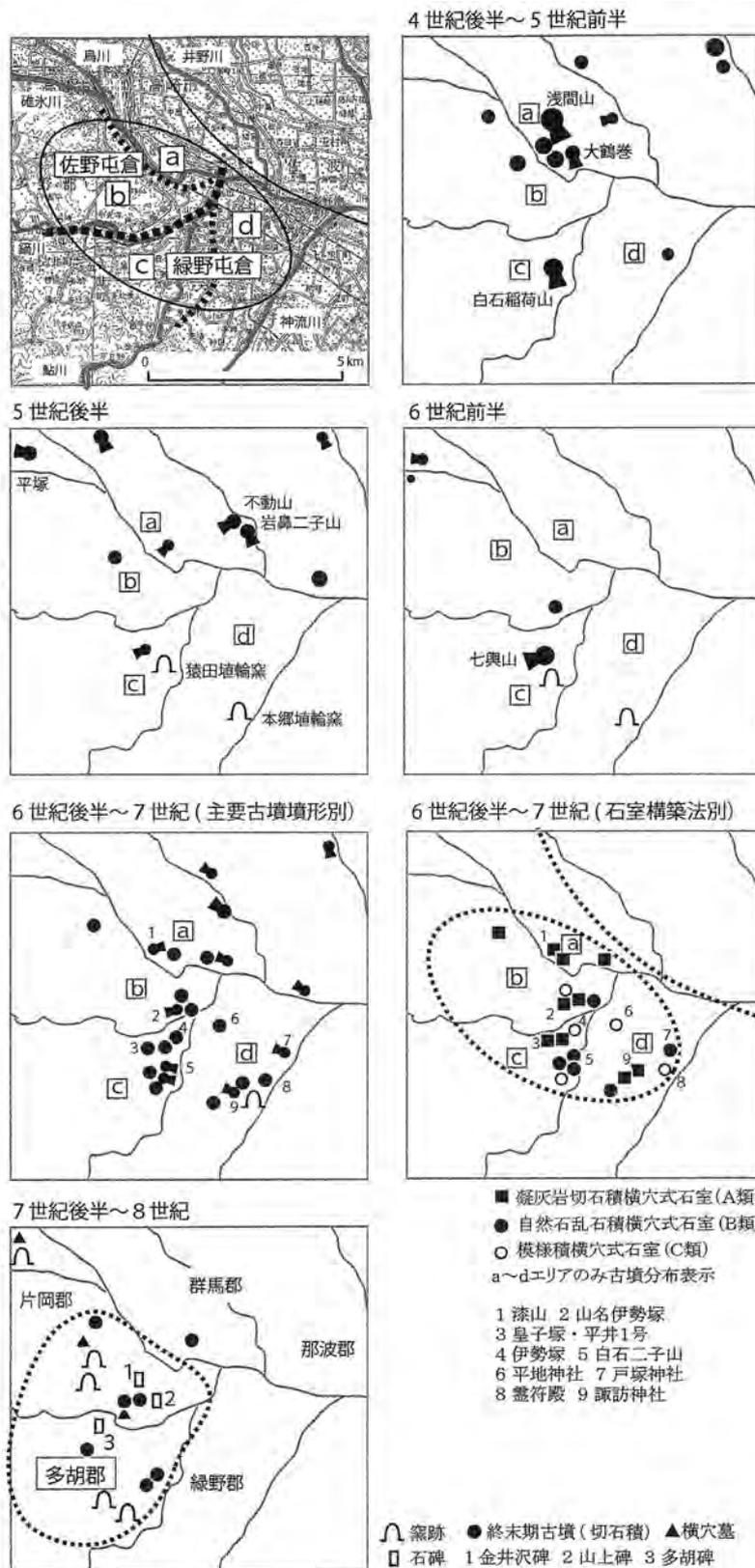


図17 4小地域の遺跡動態と屯倉

加えてこの時期には円墳にも優勢なものがあり、皇子塚古墳は31mの円墳だが複室構造のA類石室が構築されている(図16)。平井1号墳も30mの円墳でA類石室を内蔵する。これらの古墳からは器財埴輪を中心とした多彩な形象埴輪、装飾付大刀(環頭大刀・円頭大刀・頭椎大刀)が出土しており、その優勢さを証明する(図15)。

B類石室の円墳にも江原塚古墳(20m)のような優勢なものがある。両袖型胴張石室をもち、乱石積の間に棒状礫を差し込むなど、C類石室(模様積み)の先行型式と考えられ、C類が新しく分出したことを証する。また、C類石室を持つ円墳でも伊勢塚古墳や平地神社古墳のような精緻なものが6世紀末には出現する。

終末期古墳では、方墳の可能性が指摘される喜蔵塚古墳(25m)、円墳の境塚古墳(23m)があり、凝灰岩切石切組積の石室が構築される。

このエリアでは、5世紀後半に猿田埴輪窯の成立が知られ、広く上毛野西部への供給を担った。この頃、上毛野では須恵器の在地生産も開始されており、窯は未発見であるが胎土構成から藤岡市域で焼成されたものが多いと考えられる[藤野2007]。これらを受けて、粘土資源を蔵した丘陵部の開発が6世紀には大きく進展したとみてよからう。

○d小地域

神流川西岸の広大な平野部を背景としており、後に丘陵を負う地勢である。丘陵間の狭隘地に位置する三本木地区には、舶載三角縁神獸鏡3面の出土伝承がある。4世紀の前方後方形周溝墓(30m)を皮切りに、5世紀前半の倭製鏡と石製模造品をもつ円墳(稲荷塚古墳、20m)などが細々と形成されてきたが、6世紀後半になって前方後円墳が初出する。

前方後円墳では諏訪神社古墳(57m)、別所堂山古墳(34m)、高橋塚古墳(24m)がみられ、A類石室が採用された(図16)。また円墳の諏訪神社北古墳(25m)でもA類石室を構築する。ほかに、前方後円墳では胴張りプランのB類石室(一部模様積みの傾向を示す)をもつ戸塚神社古墳(53m)も出現しており、このころから地域形成が急速に進んだと考えられる。C類では霊符殿古墳(33mの円墳か)に長大な模様積み石室(全長9m)が存在する。この地域では、エリアによって小型墳にもそれぞれA・B・C類石室がみられるので、A類に用いる凝灰岩産地がこのエリアにも存在する可能性が高い。

本エリアは現藤岡市街地の大半を占める烏川南岸段丘上の平野地形であるが、弥生後期の遺跡が全く存在しないため、この段階から新たな灌漑によって農業経営が進展した可能性が高い。また、神流川の段丘崖を利用して本郷埴輪窯跡が形成されており、主として6世紀に上毛野西部に広域供給が成されている。また、神流川を遡ると山岳部となるが、秩父古成層に由来する鉱物資源が包含され、和銅が採掘された秩父地域に接続する。いずれにしても6世紀後半に著しい展開を見せた地域といってよい。

3 石碑からみる佐野屯倉の実態

佐野屯倉と山上碑・金井沢碑

この4小地域は、さらに2大別地域に分けられる(図17)。一つはc+d小地域で、後に緑野郡となるエリアである。以下「緑野地域」と呼ぼう。一方、群馬郡と片岡郡の2郡にまたがるa+b

小地域は、下で述べるように「佐野屯倉」の推定域であり、ここでは「佐野地域」と呼ぶことにする。以下では、考古学と文献史学の双方から、屯倉の実態について瞥見していきたい。

まずは佐野屯倉について、当地に所在している2つの古代石碑（山上碑・金井沢碑）から検討する（図18）。金井沢碑は、b小地域の丘陵部に所在する神亀3年（726年）建立銘のある高さ110cmの自然石碑で、次の112字が刻まれている。

「上野國羣馬郡下賛郷高田里 三家子□為七世父母現在父母 現在侍家刀自他田君目
類刀自又兎加 那刀自孫物部君午足次瓢刀自次若瓢 刀自合六口又知識所結人三家毛人
次知万呂鍛師儀マ君身麻呂合三口 如是知識結而天地請願仕奉 石文 神亀三年丙寅
二月廿九日」（□は欠字）

本碑は奈良時代前期の地域有力集団による仏教供養碑であるが、その祭祀の中核となるのが三家氏とその一族であり、これに婚姻や仏教信仰によって他田君氏、物部君氏、鍛師の儀部君氏が結合していることが読み取れる。なお、碑の建主である三家氏の性格は、同じb小地域の丘陵谷部に営まれた山上碑によってさらに明確となる。

山上碑は「辛巳歳」建立銘をもつ高さ111cmの自然石碑で、完存品としては日本最古の石碑として知られ、次の53字が刻まれている。

「辛巳歳集月三日記 佐野三家定賜
健守命孫黒壳刀自此 新川臣兎斯多々
弥足尼孫大兎臣娶生兎 長利僧母為記
定文也 放光寺僧」

建主の長利僧は放光寺の僧であり、上毛野の古代寺院の創建年代と年号使用の関係から辛巳年は681年（天武10年）とみられる。碑は、長利が母（黒壳刀自）のための建てた仏教供養碑であり、放光寺は出土文字瓦から、東国最古級の古代寺院で、塔心礎や石製鴟尾、根卷石などに特徴をもつ前橋市山王廃寺に充てられている。碑は終末期古墳の山上古墳に近接するが、同古墳の築造は7世紀中葉までに収まることから、建碑は黒壳刀自の追葬（帰葬）に際してのものであったと推定されている〔白石2003〕。

長利は、新川臣の流れを汲む斯多々弥足尼（現存地名から利根川以東の豪族とみられる）と健守命の末裔の黒壳刀自の婚姻で生まれたと刻んでおり、健守命を「佐野三家定賜」した人物としている（図18）。し

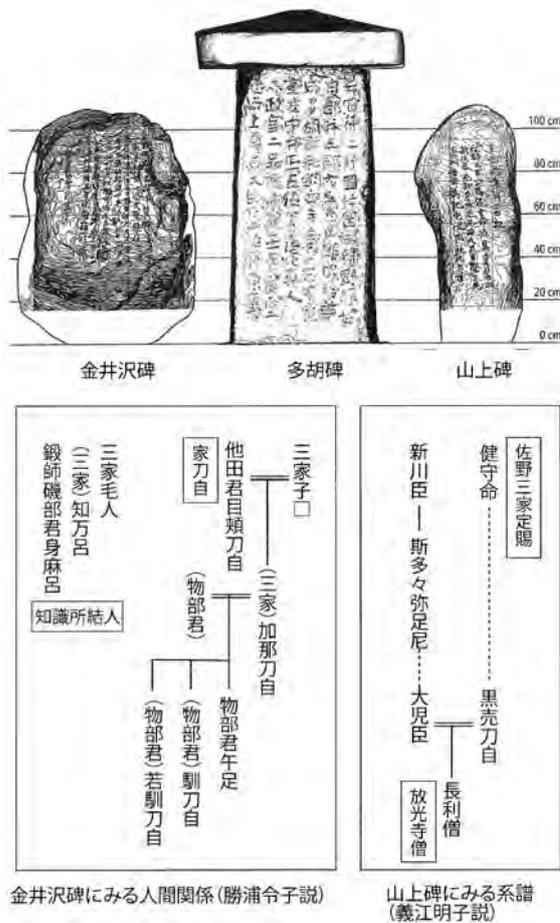


図18 上野三碑と山上碑・金井沢碑の人物関係

たがって本碑は母の供養碑ではあるが、一面では、建碑者が佐野屯倉設置者の末裔であることを誇示する性格を合わせもったものだったと言える。なお、長利の母の黒壳刀自は健守命の孫と記されるが、孫を「子孫」と読む説〔義江 1986〕が支持されているため、「長利-黒壳刀自-○……○-健守命」のように黒壳刀自と健守命の間には2代以上が挿入される可能性が高い。

図 19 は、黒壳と健守の間を最短の2代分と仮定し、各人は親が25歳の時に出生し、50歳まで生存したとする単純なモデルとして作成したものである。このモデルでは、健守は6世紀第3期半期に活動した人物となるし、間にもう1代入るならば6世紀中葉の人となる。このように、建碑の681年を定点として遡上すれば、健守は6世紀代の人物として大過ないであろうし、屯倉の初代管理者であれば、この地域で初出あるいは再興した前方後円墳被葬者である蓋然性が高い。a小地域の漆山古墳、b小地域の山名伊勢塚古墳の被葬者が、健守命に擬せられた始祖の候補者としてふさわしい(図19)。

山上碑と金井沢碑の立地は同じ岩野谷丘陵上の直線距離で1.5kmの近さにあり、時間的差異は45年とおおむね2世代に収まる。山上碑造立者は「佐野三家定賜」者の子孫を自称し、金井沢碑造立者が「三家氏」を名乗っていることから、両者は先祖と子孫とみるのが妥当であり、碑の書きぶりからみれば当地に存在した「佐野三家」が地域ブランドとして認識されていたことが明らかである。

また、金井沢碑には、施主である三家子□の居所として、「上野国群馬郡下賛郷高田里」が明示されており、8世紀前半の三家氏の経営拠点が群馬郡下賛郷という烏川東岸のa小地域に存在したことを教える。そして二碑に代表される氏族の顕彰地(葬地)は明らかに烏側西岸のb小地域の丘陵地に位置しているのである。このように烏川をまたいで両岸に広がる氏族領域は、先の古墳石室様式①地域の分布と合致しているのである。このことからa+b小地域の範囲をかつて「佐野屯倉」が存在していた領域に比定することが可能である。

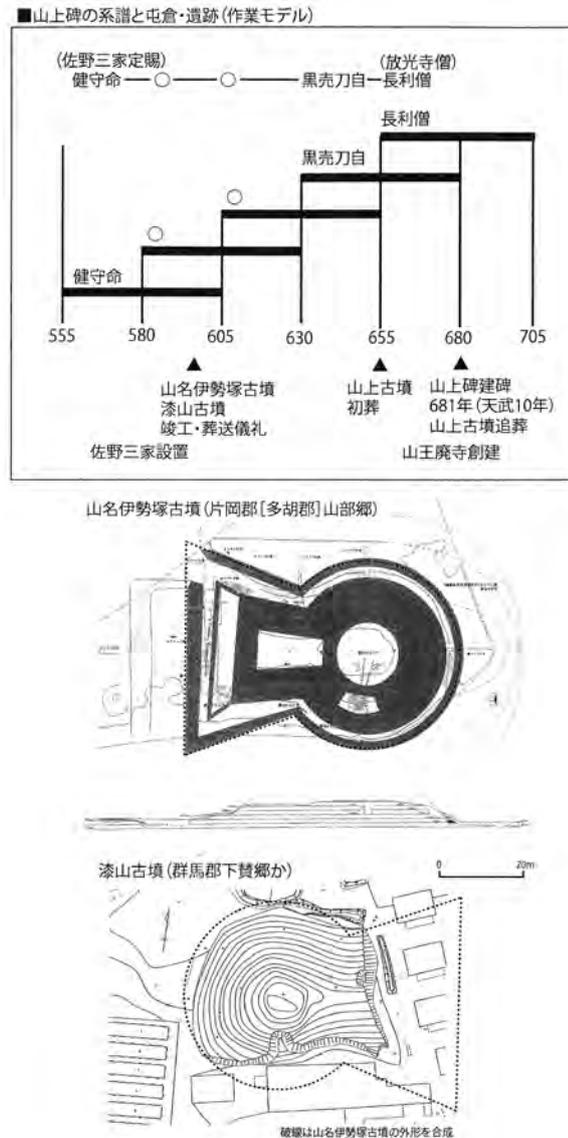


図 19 山上碑の系譜と屯倉・遺跡の関係モデル
(墳丘図は専修大学 2008『山名伊勢塚古墳』、
高崎市 2000『新編高崎市史資料編 1』より)

万葉集東歌にみる佐野地域のブランド性

ところで、『万葉集』巻14は東歌を取録したものとして知られるが、採録された東方12国のうち上野国歌が25首と最多を占めている。このうち歌枕としては「伊香保」(榛名山の古称である「伊香保山」を詠んだもの)が8首と多く、続いて「佐野」が3首みられる。佐野歌の積読は次のとおりである〔小島・木下・東野1995〕。

ア……(3406)「上野 佐野の莖立 折り生やし 我は待たむかゑ 今年来ずとも」

イ……(3418)「上野 佐野田の苗の 群苗に 事は定めつ 今はいかにせも」

ウ……(3420)「上野 佐野の船橋 取り放し 親は放くれど 我は離るがへ」

このうち前2者には、農業生産物(莖立〔菜などの野菜〕・田の苗)が読み込まれており、佐野の地が古代に豊かな農業生産地・田園地帯として知られていたことを示唆している〔佐藤2005〕。一方、後者の佐野船橋の歌は、交際を親に反対される男女の強烈な恋歌として古今に知られ、あまたの歌人に取り上げられ、葛飾北斎の画題にも選ばれた名歌である。

ここでは最後の佐野船橋に注目したい。『類聚三代格』承和二年六月二九日官符には、急流で渡船が困難な場合に船橋(浮橋)を設けた事例が知られる〔川原2012〕ので、佐野船橋が実在したとすれば、一帯で最も水量が豊富な佐野地域の烏川に設置されたとみるのが妥当である。上述のように、烏川兩岸にまたがるa+b小地域から成る佐野三家の領域を一体化するためには、基幹的な渡河施設(船橋)が存在した可能性は高く、それが歌に詠まれる名所として認知されていた蓋然性は、地理的にも歴史的にも高いものである。

佐野の地は、古墳時代前期から利根川水運の拠点地であり、古墳が交通の要地に占地する事例が多いことからみても、船橋のような主要交通媒体は在地首長によって管掌されていたとみてよいだろう。船橋兩岸の勢力を挙げるならば、7世紀においては烏川西岸の山上古墳(円墳・径15m)と東岸の安楽寺古墳(円墳・径20m)の被葬者、さらに遡った6世紀後半においては西岸の山名伊勢塚古墳と東岸の漆山古墳の被葬者が管掌者の候補になりうる存在である。いずれの古墳も同規模で、A類石室をもつ古墳である。想像をたくましくすれば、佐野船橋の歌において親に間を裂かれる男女は、船板を取りはなす権限を有したこうした豪族の子女がモデルということになる。

いずれにしても、万葉集に3首が採録された佐野の地は、豊かな農業先進地、地域交通の要地として広く知られた名所だっただろう。歌垣が催され、人々・物資が交流する岐であり、渡来系の建碑文化が上野三碑(山上碑・金井沢碑・多胡碑)として倭風に咀嚼され、展開した地でもあった。万葉集東歌の上野国歌の多くも佐野一帯(佐野・多胡・甘楽のエリア)に集中し、渡来文化の定着と古代文学の展開は密接に関わっていたと指摘されている〔佐藤2005・2012〕。

佐野屯倉成立の史的背景

佐野地域の地域経営は、古墳動態からみると、上述のように6世紀前半に一度衰微したあと6世紀後半に再構築されたa小地域(烏川東岸平野部)と、6世紀後半に飛躍的に伸長したb小地域(烏川西岸丘陵部)から成り立っていた。

まずa小地域における6世紀前半の衰退に関しては、①西暦500年頃の榛名山噴火並びに大規模な泥流災害による農業水利体系の崩壊、②これに伴う榛名東南麓の保渡田古墳群被葬者を首班とす

る首長連合の解体、③物流を担った河川交通システムの破壊などが原因として考える。

a 小地域の烏川自然堤防背後の後背湿地に存在した榛名山系の灌漑系統は泥流の来襲で破綻し、さらに河川の埋没による地下水位の変化などが農業水利全般に打撃を与えた可能性が考えられる。また、榛名山から旧利根川に流入した膨大な土石流が沿岸に広がったことが軽石（角閃石安山岩）の分布から知られており〔秋池 2000〕、3 世紀以来の太平洋に接続してきた河川交通は川床上昇によって甚大な影響を受けたことは間違いない。川の津を管掌してきたであろう佐野地域の凋落が想定されるのである。

こうした未曾有の災害を克服し、半世紀後の 6 世紀後半に再び前方後円墳の築造が達成されたのは、外部からの技術的、人的移入による地域再編がなされたと見るのが妥当であり、「佐野屯倉の設置」をその最大の要因に求めることができる〔若狭 2008〕。佐野地域東端の古代水田域から奈良時代の銅印「物部私印」が検出されていること、金井沢碑に「三家氏、物部君氏・他田君氏・磯部君氏」など多様な氏族結合（図 18）が見られ、同時に「物部・磯部・他田（部）」の存在が想定されるように、倭王権中枢域から技術者集団が移入し、部民が設定されることを契機として、地域復興が推進されたと考えられる。

一方、6 世紀後半から急速に伸長する b 小地域は、後の郡名「片岡」からも推し量れるように丘陵地であり、新第三紀の古い地質によって形成されている。このため、粘土・凝灰岩・亜炭などの鉱物資源、丘陵に由来する森林資源が潤沢であった。ここでは、5 世紀後半から丘陵部への遺跡進出が認められ、須恵器の在地窯が創始された可能性が高く、奈良時代以降には上野国有数の須恵器生産地となる。同時に、凝灰岩加工利用が 5 世紀中頃の舟形石棺製作から開始され、後期には A 類石室の石材としても利用された。丘陵の山林資源は建築材としての供給とともに、窯業用や鉄器生産用の薪炭に充てられていったとみられる。

ちなみに、b 小地域の山上古墳や山名伊勢塚古墳が所在するのは、古代の「山部郷」（後に読みが「やまな」に転化）であり、山林管理とともに鉱山資源を司る「山部」が設置されたことが明らかである。金井沢碑の「鍛師」磯部君の用務を彷彿とさせるものである。山部郷は、天平 10（738）年に法隆寺（奈良県斑鳩町）の食封であったことが確認されるが、法隆寺の壇越として山部連氏があり、法隆寺の所在が「夜麻郷」（山部の転化）であることから、上宮王家・山部氏・法隆寺と当地の関連も指摘されるところである〔松田 2009〕。

以上のように、b 小地域は手工業振興のための資源供給地として開発されたことにより、6 世紀後半に著しく土地利用が進んだとみるのが妥当であり、その契機は山部や物部をはじめとした手工業に長じた技術集団の移入、すなわち佐野屯倉の設置に関連するものとして大過ないであろう。このとき、後の石碑文化やその碑文にみる仏教理解の厚さにみるように、渡来人技術者集団があわせて配備された可能性が高い。山上碑・金井沢碑が新羅型式の自然石碑であること、『続日本紀』天平神護 2（766）年に「上野国在住の新羅人子午足ら一九三人に吉井連を賜う」の記事がみえることから、新羅系渡来人の配置が濃厚であろう。上毛野西部には、5 世紀から渡来人集団が編成されていたことは上述したとおりであり、こうした古渡りの渡来人居住の下地のうえに、新たな渡来人配置が重層したのではないか。

屯倉設置と新たな人・技術の移入

佐野屯倉は中央史料にみえず、在地史料にのみ現れる屯倉であるが、こうした屯倉は各地に存在したと考えられる。先のケースからみると、6世紀後半代に中小前方後円墳が再興または新興するエリアや、これまで未利用であった土地の開発が進むケースを抽出し、これに古代氏族分布や古社、古地名を投影することによって、未知の屯倉の存在が想定できる場合があると思われる〔桃崎2010〕。

これまで屯倉とは、倭王権が政治的軍事的要地として設置・掌握したもの（館野和己のA型屯倉）、王権が豪族から田地等の土地を割取し、貢納を課したもの（B1型屯倉）、王権が直営で田地等の開発を行ったもの（B2型屯倉）に大きく分類され〔館野1978〕、王権の主導・強要、直轄性などが強調される側面が強かったが、屯倉経営にあたっては在地首長の経営協力が不可欠で、実質的には在地首長に委任されていたとする仁藤敦史の指摘〔仁藤2009〕は正鵠を射ていると考えられる。

佐野地域のあり方は、伝統地域が災害によって疲弊した後に新たな水利技術・手工業技術の受容ならびに渡来人を含む技術集団の移入と再編（部民・名代・子代等）によって再生と新興を果たしたと推定できるケースである。屯倉の設置にあたっては、倭王権による東国への影響力の拡大や経営基盤の扶植という政治意図とともに、在地での経済力・政治力の飛躍（再生・転換）を図ろうとする地方首長の欲求との間に「双方向の受益関係」が存在したと思われる。

佐野屯倉の経営を王権から委任された最初の在地首長は、地域の復興・新興の表象である記念物としての前方後円墳を築造し、埋葬されたと考えられる。この人物は後に、山上碑文にみる「健守命」という英雄の人格として伝承されることになったのであろう。

外部からの技術的・人的な梃子入れによって経済成長が促された佐野屯倉の地は、万葉歌に詠われる名所にまでなった。加えて、わが国に18例しか現存しない古代碑の2例が域内に造立されるなど、飛鳥時代までには仏教・文字文化などを操る文化的風土を形成していった。しかし、そうした物証にも関わらず、佐野屯倉は中央史料には存在しないのである。逆にいえば、中央史料に記された屯倉は、数多くの屯倉のなかで、王権と特段の関係を有した存在であったと考えることが許されるのではないか。

4 緑野屯倉をめぐる

緑野屯倉の実像と武蔵国造乱

これまでの検討で、上記の4エリアを2大別したうちのa+b小地域は、在地史料の存在と考古学的物証から「佐野屯倉」の所在地に比定することができた。残るc+d小地域には在地史料は存在しないが、後に令制下の緑野郡となるエリアであることから『日本書紀』安閑2年に設置が記載された「緑野屯倉」の有力な候補地となる。c小地域は丘陵を擁して窯業生産地として展開していく点、d小地域が開墾地域で広大な平野部の開発が想定される点などは、先のa+b小地域の経営方式の組み合わせ（農業生産地+手工業生産地）とよく類似しており、その技術基盤や生産手法は佐野屯倉と連動していた可能性が高い。佐野屯倉の存在が確実視されるがゆえに、その隣接地に、中央史料にしか見えない緑野屯倉が実在した蓋然性も増すのであり、鎬川を境として佐野・緑野の2つの屯倉が七輿山古墳被葬者の共立解体後に並立していたと推定したい。

すでに述べたように、両屯倉の経営には、治水灌漑による耕地再興と、窯業を基軸とする手工業が組み合わせられ、これを推進する在地首長層に加えて、先述した石室複数型式の併存にみるような多様な集団（渡来人を含む）が関わったとみられる。さらに、このエリアには6世紀後半から7世紀にかけて多様な装飾付大刀が集中しており、徳江秀夫の集計によれば上毛野では176振を数えて国内最多とみられ、その多くが佐野・緑野エリア並びに群馬郡南部・那波郡エリアに集中しているのである〔徳江2005〕（図15上段）。装飾付大刀は、この時期に中央からもたらされた威信財として特に重視されるが、当地では特定古墳に過度に集中するのではなく、多くの古墳に分有されていることに特色がある。このことから屯倉の経営を担っていた複数系譜から成る在地の勢力は、比較的フラットな構造であり、階層差よりも職掌や氏族系譜などによって墓室の型式を異にしていたとみるべきであろう。

では、なぜ緑野屯倉は文献に記載され、佐野屯倉は記載されなかったのか。先の考え方にたてば、それは緑野屯倉の設置がより政治性を帯びたものであったからということになる。すなわち、「武蔵国造の乱」との関係である。

いわゆる「武蔵国造の乱」は、安閑元年（534年）、笠原直使主と同族の小杵の間で武蔵国造の位を争って勃発した内紛として次のように『日本書紀』に記載されている。

「武蔵國造笠原直使主與同族小杵 相争國造（使主・小杵皆名也）經年難決也 小杵性阻有逆 心高無順 密就求援於上毛野君小熊 而謀殺使主 使主覺之走出 詣京言狀 朝廷臨斷 以使主爲國造 而誅小杵 國造使主 悚憲交懷 不能默已 謹爲國家 奉置横淳・橘花・多水・倉櫟 四處屯倉」

紛争当事者の一方である小杵が上毛野君小熊の支援を求めたため、一方の使主は朝廷に申し立てて国造となり、結果的に小杵は誅された。このため、勝者の使主は喜び4つの屯倉を献上したという内容である。さらに『日本書紀』には、翌年の安閑2年条（535）に全国26箇所の屯倉設置を一斉に記載しているが、そこに上毛野の緑野屯倉が含まれている。

本稿では記事の内容に踏み込まないが、ここでは、①国造制の存在、②地方豪族の反乱、③王権による反乱者の制圧、④乱後における屯倉の設置、がセットとなっている点が重要であり、これより少し前の継体21・22年（527・528）に勃発した筑紫君磐井の反乱においても、②磐井の反乱、③継体の委任を受けた物部麁鹿火による軍事鎮圧、④磐井の子葛子による糟屋屯倉の献上、が組み合わせられている点で相互の事件は類型的である。継体・安閑期に内乱を王権が鎮圧することによって東西の有力地域が換骨奪胎され、やがては屯倉・国造制という新たな制度が樹立されていく経過が、配列的に記載されていると考えられる〔館野1987、伊藤1999〕。

2つの事件のうち磐井乱に関しては、これを虚構とみたり、発生時期に疑問を呈する意見には接しない。しかしながら、武蔵国造乱に関しては諸説が存在しており、時期をそのまま認める説、事件そのものを疑問視する説、5世紀の事件とする説、600年前後（推古朝）の事件を遡上させたとする説等が並列し、空間的には南武蔵と北武蔵勢力間の対立、北武蔵での内紛とする見方があることが城倉正祥によって詳細に整理されている〔城倉2011a〕。この事件は、古墳後期の東国史における政治状況を理解するうえで重要であり、文献史と考古学の成果の統合が求められる。

佐野・緑野屯倉の設置動向

武蔵国造乱の後の屯倉設置に関して、使主の献上による武蔵4屯倉が取り上げられる機会が多いが、ここでは本論の主題にそって緑野屯倉を掘り下げる。既述のように緑野屯倉は安閑2年設置の26屯倉の一つとして記載されているが、その集中から信憑性を疑う意見が定説であった〔津田1950〕。しかし、安閑・宣化期の屯倉設置記事の集中を、加耶救援を軸とした倭と朝鮮半島の国際情勢の緊迫に関わる備えとして説明する意見は傾聴される〔仁藤2009〕。筆者もここまでの検討から佐野屯倉・緑野屯倉ともに実在し、次のように連動して解釈することが可能であると考えられる。

まず、佐野屯倉の理解を再度まとめると次のようになる。

- ① 山上碑の人名系譜から佐野屯倉の設置が6世紀代に入ると想定されること、
- ② 七興山古墳築造の後に地域圏が分解し、6世紀後半になって中型前方後円墳の新出・復興がなされ、地域集団の再編と技術移入の画期が認められること、
- ③ 地域再編の時期そのものは、これら6世紀後半の前方後円墳被葬者の生前活動時に求められるために、6世紀中葉～後半前葉の可能性が高いこと、
- ④ 隣接する群馬郡・那波郡域でも同時期に地域再編が行われ、古墳石室型式の再構築（角閃石安山岩削石積）が佐野・緑野地域と連動して進行していること、
- ⑤ その時期は榛名山の第2回目の噴火で土石流・洪水の大災害が発生した以後で、須恵器のTK43型式期であること、
- ⑥ すなわち屯倉設置は6世紀中葉～第3四半期の可能性があり、上毛野の枢要地が火山災害で疲弊した情勢を契機として実行されたものであること、
- ⑦ これらのことから佐野屯倉設置は、水利システムの復興や丘陵部開発のための新たな技術群（人も含めた）の導入という在地社会の要請と、王権中枢の東国への影響力拡大という意図が双方向的に合致した産物であったこと。

このように性格づけると、七興山古墳解体後の古墳動向が佐野屯倉エリアと連動し、その地域構造が佐野エリアと酷似していた緑野地域も、屯倉設置による地域形成が成されたと解釈することに矛盾ないのは前述のとおりである。したがって、6世紀第2四半期に置かれている『日本書紀』の緑野屯倉設置記事も、その紀年を大幅に遡上・架上したものとは言えなくなる。佐野・緑野エリアの6世紀後半の考古学的属性の類似を評価するならば、両屯倉の成立は七興山古墳共立体制の解体後、6世紀中葉から後半に求めるのが妥当であろう。

埼玉古墳群と埼玉二子山古墳

ここで、北武蔵に所在する埼玉古墳群（埼玉県行田市）に触れておく必要がある。埼玉古墳群は、利根川と荒川に挟まれた微高地上に成立しており、河川交通（万葉集にみる埼玉の津）と物流を掌握するとともに、河川沿岸の低湿地経営を背景として武蔵地域を統合した首長系列の墓域がここに集約されていると考えられる〔関2012〕。5世紀後半の埼玉稲荷山古墳（120m）を嚆矢として、8基の前方後円墳が古墳時代後期を通じて築造され、終末期方墳の戸場口山古墳まで継続する。武蔵国造の奥津城と評価される所以である。古墳群中では最大なのは、稲荷山古墳に続いて成立した埼玉二子山古墳である。葺石は存在しないものの、墳長130m級の規模は東国の後期前方後円墳では

七輿山古墳に次ぐものである。

ところで埼玉二子山古墳はその築造時期に関して、5世紀後半と6世紀前半の2説がある。なかでも前者は、同古墳の周濠覆土に堆積した斑状の白色粘質土層を榛名山のHr-FAテフラ（榛名山初回の大噴火）に比定することから導かれている〔坂本1996〕。FAは須恵器のMT15型式古段階の降下であり、くだんの白色粘土層がFAとするならば、二子山古墳はTK47型式期の築造で5世紀に遡上する。しかしながら、粘土層は1980年代の調査時に記載されたもので、FAに同定する化学的分析を経ておらず、これに依拠した年代比定には慎重さが求められる。近年、同古墳群の奥の山古墳（6世紀中葉）の盛土の下層が調査されたが、FAは可視的な層として確認されず、土壌の洗い出しの結果としてFAの鉍物成分が確認されているに過ぎない〔埼玉県教育委員会2014〕。このことから件の白色粘土層がFAであることの証明は難しいと考えられる。よって埼玉二子山古墳の年代に関しては、城倉正祥による埴輪の型式学に則った6世紀前半説を取るのが妥当であろう〔城倉2011a・2011b〕。

6世紀前半の大型前方後円墳の史的意義

以上の検討を踏まえたうえで、6世紀前半の130m以上を達成した前方後円墳を挙げると、全国で6ないし7基を挙げることができる。九州では福岡県岩戸山古墳（132m）、畿内では今城塚古墳（181m）・河内大塚古墳（335m）、中部では愛知県断夫山古墳（151m）、（同大須二子山古墳〔138mか〕）、関東の群馬県七輿山古墳（146m）、埼玉県埼玉二子山古墳（130m級）であり、これらの前方後円墳は当時の倭王権の構成を考えるうえで重要な位置を占めている（図20）。

諸古墳に共通するのは、いずれも文献史上の人物・事件とのかかわりが注目されることである。今城塚古墳は継体墓説がほぼ定説の位置を占めており、断夫山古墳は継体妃の親である尾張連草香に比定する意見〔赤塚1989〕が多い。岩戸山古墳は『筑後国風土記』逸文によって、その編纂時から筑紫君磐井の墓に擬されており、これに関しては今日でも異論に接しない。また、河内大塚山古墳は近年、継体の子である安閑の未完成墓とする説が提起されている〔十河2007ほか〕。このように、6世紀前半において墳長130mを超えた前方後円墳は、いずれも継体との関わりの中で歴史的に解釈されているのである。

それでは、上毛野と北武蔵に隣接しあって存在する七輿山古墳と埼玉二子山古墳の2古墳をどう捉えるべきであろうか。双方の被葬者は同世代人の可能性が考えられ、結論を述べれば、武蔵国造乱との関係を考慮することが自然である。

七輿山古墳と今城塚古墳、断夫山古墳の墳形規格の類似と時期の整合は先に指摘したところであり、七輿山古墳被葬者は継体との関係を背景にして、上毛野の共立王の位置を獲得したと考えられる。榛名山の第1回目の噴火で被災しなかった上毛野

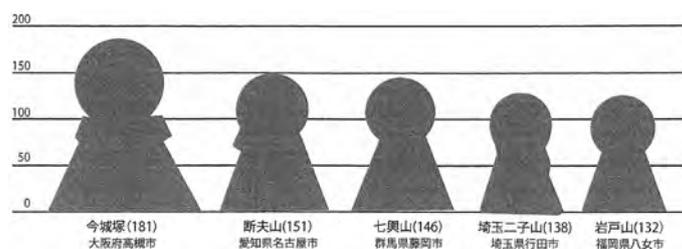


図20 6世紀前半の主要大型前方後円墳 (130m以上)

南端、鐮川南岸エリアをバックボーンとして成長し、噴火被害で勢力を衰退させた保渡田古墳群体制に替わる位置を占めた(図21)。保渡田古墳群は主として雄略期に並行した勢力であり、七輿山被葬者はこれとは異なる継体王権と結びついて伸張した事情を想定させる。

しかし、七輿山古墳以後に大型前方後円墳が継続しないのはその共立基盤が1代で解体したからであり、前述のようにその膝下は4ブロックに再編され、7世紀まで長く続いた埼玉古墳群とは極端に明暗を分けている。この考古学的現象と「武蔵国造乱」にみる上毛野と武蔵をめぐる事情はよく合致しているといえる。七輿山古墳の勢力が継体の後続政権の時に減衰し、一方埼玉勢力がさらに発展を続けた事情も併せて読み取れるのが「武蔵国造乱」の記事ではないかと考えられ、北部九州最大勢力が排除された事情を語る「磐井乱」とともに、東国最大勢力にも倭王権の関与が及んだ事案として、前後に配列されていることが重要視される〔伊藤1999〕。風土記編纂時に岩戸山古墳が磐井墓と認識されていたように、七輿山古墳を上毛野君小熊墓、埼玉二子山古墳を笠原直使主墓に擬す歴史認識が、かつて東国に存在した可能性は否定できないだろう。

関東で後期最大級の埴輪窯として稼動する埼玉県鴻巣市生出塚窯跡の創業は埼玉二子山古墳築造を契機としており〔城倉2011b〕、荒川水運を活用して相模や房総にまで製品が流通した〔日高2013〕。使主が献上したという武蔵の4屯倉は荒川・多摩川下流に比定され、これも水運を利した支配を想定させるものである〔田中2005〕。上毛野勢力が古墳前期の集団移入以来運用してきた利根川・荒川水運体系は、埼玉勢力の勃興によってその中継を経なければならなくなった。七輿山古墳の146mに伍する埼玉二子山古墳の130m級の規模は、そうして伸長した埼玉勢力の力量を背景として理解できる。このような6世紀前半の東国有数の2勢力の相克という事件を背景とし、倭王権が関与した強い政治性ゆえ、その後成立した緑野屯倉の存在が『日本書紀』に記載されたのであろう。

七輿山古墳築造の後に発生した榛名山の2回目の噴火は、角閃石安山岩を含む膨大な量の泥流を再び流出させ、川床の上昇によって利根川上流の水運体系は一時的に機能不全に陥ったと考えられる。一方、荒川水系には角閃石安山岩の分布はほとんど及んでおらず〔秋池2000〕、泥流被害を蒙らなかった荒川の水運を差配する埼玉勢力はいっそう優位に立つことになったであろう。

国造と屯倉経営者

緑野屯倉と七輿山古墳の関係については複数の見方が存在するが⁽²⁾、以上の検討を踏まえれば、七輿山古墳被葬者を共立した体制の崩壊と、人的・技術的移入を介した倭王権との関わり強化は同調した動きであり、これを緑野屯倉・佐野屯倉の成立契機と筆者は考える(図21)。ここでは、上述したように石室型式を同じくする4小地域の首長層が、比較的等質的な技術基盤や開発形態を共有して地域経営を推し進めた。再び七輿山古墳に匹敵する共立王が誕生しなかったのは、屯倉を介して地域を均質に制御する倭王権の政策の反映と見ることができる。

屯倉にかかわる集団の比較的等質的な繋がりには、1世紀以上後の金井沢碑にみる三家氏・物部君氏・他田君氏・鍛師磯部君氏の関係(信仰による結縁、婚姻による同族形成、職能集団の存在)に継承された可能性が高い(図22)。ここでの部姓の氏族の多さは、屯倉の経営と部民の設置との関わりを想定させ、東国の後期大型前方後円墳の多出を、名代・子代の設置に伴う倭王権の政策と

関係して説明した白石太一郎の諸説とも整合的である〔白石 1992〕。

それと同時に、金井沢碑文に上毛野朝臣氏（上毛野君→天武朝に上毛野朝臣）が見えないことも重要である。佐野・緑野の屯倉領域では、6世紀後半には60m級前方後円墳が上位であったが、旧利根川水系・井野川水系ではこの頃までに噴火被災を克服した旧来の榛名山麓勢力が、綿貫観音山古墳や総社二子山古墳のような100m級の大型前方後円墳を復活させており、これを頂点として中型前方後円墳・円墳が複層的に築造されている（図7・15・21・22）。中型前方後円墳を頂点とした屯倉エリアとの差は大きいと見るべきであり、既に述べたように後者を上毛野国造系の勢力とみるのが妥当であろう。

川原秀夫は古代上野国の豪族に「君姓」氏族が多い

ことを挙げ、屯倉設置に関連した物部氏などの伴造系氏族や名代・子代系の氏族が「連姓」・「臣姓」をとらず、有力国造である上毛野君との在り地での関係形成によって「物部君」「壬生君」といった珍しい「君」姓を選択したと解釈している〔川原 2005〕。上毛野君氏は国造として、王権に委任されて国内の佐野屯倉・緑野屯倉を大局的に管掌する立場であり⁽³⁾、現地での経営は上毛野君氏の傘下にある三家氏（の前身首長）などを筆頭にして、物部君・磯部君・他田君に代表される中位豪族層が担っていたと考える。上毛野君（朝臣）氏は、上位の国造の末裔であったがゆえに金井沢碑にみる同列的な氏族結合には参画しなかったであろう。

ところで、上毛野では西暦600年前後の多様な装飾付大刀が国内で最も多く出土しているが、東部には少なく、西部の多胡郡域（建郡前は片岡郡南部・緑野郡・甘楽郡西部）と群馬郡南部・那波

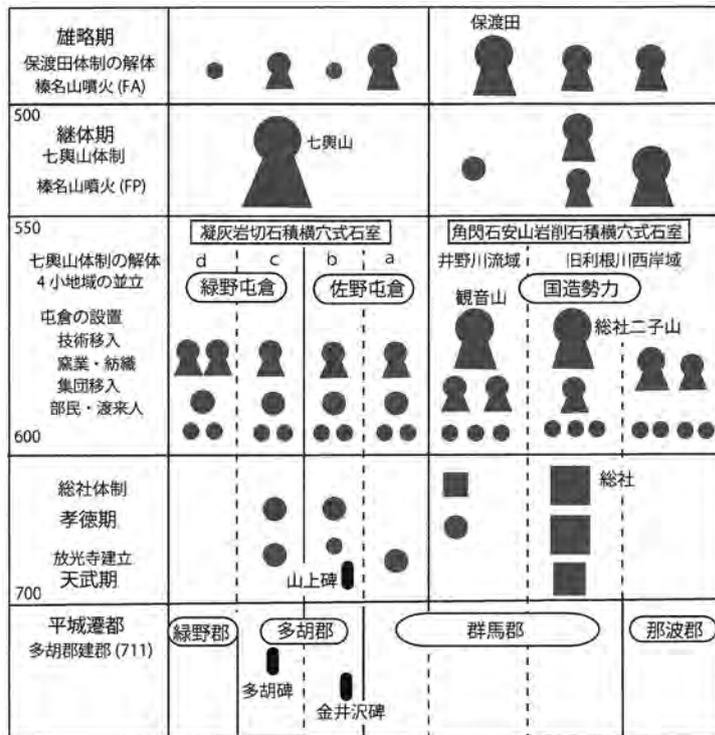


図 21 上毛野西部における国造と屯倉の関係モデル

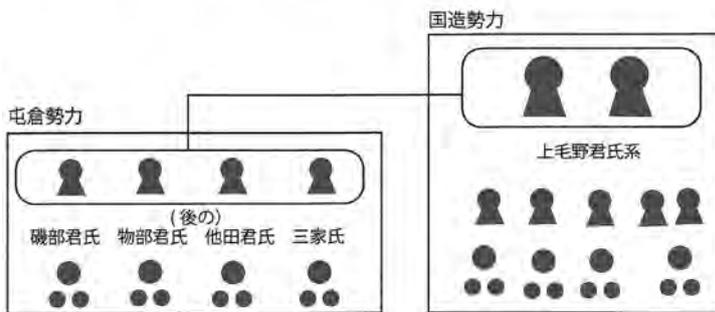


図 22 国造勢力(上毛野君氏系)と屯倉勢力との関係モデル

郡に偏っていることは既に述べたところである。ここでは、大型墳に複数振りが副葬されるとともに、中小古墳にまで幅広く行き渡っている状況がみられる（図15）。装飾付大刀については、その形式毎に異なる中央豪族によって分配が行われたと説かれており〔新納2001など〕、これに則れば、上毛野の諸豪族が大刀を入手する（配布を受ける）ため、多元的な政治的ネットワークを有していたと想定することになる。

ただし、なかでも例数が多い龍鳳環頭大刀について、100m級前方後円墳への副葬がみられないことに注意が必要である。これは、①上毛野の最上位層が龍鳳環頭大刀の配布元と関係を持たなかった、②同大刀の配布元が上毛野の最上位層（国造）そのものであった、という2つの解釈を可能とするものである。

上毛野君氏は、大仁上毛野君形名が蝦夷征討の将軍に任じられた記事（『日本書紀』舒明9（637）年）にみるように、その一部が7世紀前半までには中央氏族化していたとみられる。このため、6世紀後半には既に中央に拠点を持って貴重な財物を調達し、国造の立場で国内の屯倉経営者などに配布を行っていた可能性を考えておきたい〔松尾2005〕。

まとめ

以上、古墳前期・中期・後期それぞれの時期において、東国首長が行った地域経営の実像について、特に関東平野内陸部の上毛野地域を中心に検討し、次の6段階の地域経営プロセスを指摘できた。

1. 前期前半は、在来の弥生系集団とは異なる技術基盤をもった東海地方西部からの外来系集団により、低湿地開発が大規模に推し進められた。これに伴い未利用地の耕地化が促進され、水稻農耕が著しく進展した。同時に、畿内から海上ルートで関東沿岸に至り、内陸まで連続する水上交通ネットワークが構築され、外来者は海路から河川ルートで移入した。低湿地開発の推進と広域交通ルート（特に水上交通）の構築が、古墳前期の地域形成・集団再編を推し進めた主要因であり、これを達成した豪族層が大型前方後円墳・前方後円墳の築造母体となった。上毛野における前期前半の最大規模墳は墳長130m（前橋八幡山古墳、前橋天神山古墳）であり、これが上毛野における前期農業社会の動員力の最大値を反映したものである。

2. 前期後半から中期初頭は、上毛野における前方後円墳の最大墳長が、170m前後（浅間山古墳、別所茶臼山古墳）に届いた時期である。前期前半までの首長系列が連合し、上毛野半分程度の範囲で大首長の共立がなされた。この段階で東日本最大だった浅間山古墳は、利根川水系最上流の内陸河川交通の要衝に位置しており、広域交通と物流ルートの掌握がその力の源泉と考えられる。

浅間山古墳や同時期の古墳に、大和の佐紀古墳群の墳丘規格や埴輪様式・石製模造品祭祀が採用されたことから、倭王権と深い関係形成がなされたことが確実で、治水や手工業など新たな地域開発のための技術群の導入が推進されるとともに、倭王権の対外政策〔岸本2010〕との連携などが模索されはじめた可能性が考えられる。

別所茶臼山古墳は、これまでの一河川水系の経済圏を超越し、上毛野東部の水源地である大間々扇状地端部湧水群を管掌。ここに拠点を置いて水利と祭祀を掌握し、広域用水ネットワーク傘下の族長たちに共立されたと考えられる。その膝下に、集団合意形成のための象徴施設（中溝・深町遣

跡における大規模な祭祀空間や倉)が整備されたのも、集団結合範囲の拡大をよく示している。

3. 前期末から中期前半には、古市古墳群の古墳規格が採用され、河内の王権との関係が強化されたことがわかる。東国最大の太田天神山古墳(210m)が築造され、ここに上毛野一帯の力が結集したことが明らかである。墳長200mを越えた前方後円墳は東国唯一であり、それまでの農業経済圏・流通圏などを超越した大共立によって成立したものと考えられる。その範囲は、かつて東海地方から移入した始祖伝承などで結ばれた人々の枠組とみるのが妥当であろう。

なお、太田天神山古墳の後には巨大前方後円墳が続かず、100m級前方後円墳の複数の系列に分解する。また同時に、この地に渡来文物が出現するようになる。このことから筆者は、先進技術や渡来人の移入を目論んだ上毛野首長連合が、倭王権が求める朝鮮半島での政治的行動に加わるために共同し、外交・軍事指揮者を共立したのが太田天神山古墳の出現動機だと考える〔若狭2017〕。外来文物が倭人にとってきわめて魅力的なものであったことは、5世紀以降列島各地に渡来技術が導入された事実が物語っている。『日本書紀』神功〜仁徳紀にみられる上毛野氏祖らの訪韓伝承や渡来人招致伝承は、この時期から中期後半にかけて渡来文物が多出する当地の考古学的動向と整合する。

4. 中期後半には共立が分解し、100m級前方後円墳を最大とした多数の首長系列が上毛野西部に並存する。榛名山麓では山麓水源地に首長居館が築かれ、一帯に集落集中地・前方後円墳の造墓地が移動する。居館は貯水地を兼ねた水の祭祀場となっており(三ツ寺I遺跡・北谷遺跡)、治水技術の革新が明らかである。大規模な灌漑水路・掛樋・広大な小区画水田域が組み合わさると共に、乾燥地も畑地として大規模に拓かれており、用水体系を究極まで整備して水稻農耕を拡大したうえに、多彩な畑作物や陸稲などを組み合わせた農業の一大革新期であった。加えて、鉄器製作・窯業などの手工業、馬生産の展開も大きな特質となる。

保渡田古墳群を首班とした緩やかな首長連合が形成され、舟形石棺や埴輪の規格・数量差によってその関係が秩序化・序列化された。また、各首長傘下には渡来人集団が編成されたことが、墓制(方形積石塚)・生業(馬生産・鉄器生産等)・所持文物(韓式系軟質土器・馬形土製品・冶金具・金製耳飾等)から明らかとなる。首長は彼らを先進的な地域経営に活用した。積石塚は上毛野西部に広く分布するため、各首長配下の渡来人は倭人とは識別されるとともに、擬制的に編成されていたと考えられる。前段階に萌芽した対外交流の果実が、この時期に大きく開花したのである。

5. 後期前半には、榛名山の大噴火を経て上毛野の地域構造が変質した。首長墓が点在するとともに、埋葬施設に横穴式石室が採用された。墳丘規模は小型化したのが、七輿山古墳のみが墳長146mと三河以東で最大の規模で成立した。本古墳は継体大王墓とされる大阪府今城塚古墳や、継体の支援者である尾張連氏の墓とされる愛知県断夫山古墳と規格が類似し、保渡田古墳群の衰退を受けて継体との関係を深めた上毛野の共立王であったと考えられる。

6. しかし後期後半には共立は再び分解し、七輿山古墳膝下の地域は60m級前方後円墳を最上位とする大別2地域、細別4小地域となり、ここに複数の石室型式が並存するようになる。これは、地域形成を主導した集団構成とその系譜が多様であったことを示している。同時に水田域の新興や復興、丘陵地の開発と包含資源利用が急速に進展する。外部からの集団移入と新技術の誘引が明らかであり、筆者はこれを屯倉の設置に伴う現象と理解した。

この地域には、在地史料として「佐野三家」の存在を記した山上碑（681年）、金井沢碑（726年）が残り、中央史料として「緑野屯倉」の設置を記す『日本書紀』（安閑2年）があって、史料と考古学的動向が整合する。『日本書紀』安閑元年条には、武蔵国造位を争った笠原氏の内紛、上毛野君小熊の政治的関与、倭王権による軍事的調停、武蔵の4屯倉の献上が描かれる。これは隣地である緑野屯倉・佐野屯倉の設置とも連動すると考えられ、七興山古墳勢力の解体と、埼玉二子山古墳以後の埼玉古墳群の隆盛と強く関係した事象と推定した。

なお、屯倉地域の諸前方後円墳が60m級にとどまる一方、利根川・井野川水系には角閃石安山岩製横穴式石室を有する100m級前方後円墳が複数造営された。これは「上毛野国造」に連なる勢力の奥津城とみなし、部姓氏族らが経営した屯倉を管掌した上位の勢力と捉えた。

このように、上毛野地域の地域開発・地域経営手法の推移を把握することで、古墳時代社会の構造変遷を素描した。この地が大型古墳を輩出する日本古墳時代の中核地域の一つであったことから、その歴史的展開には倭王権の政治・経済のシステムが直截に反映されていると考えられる。また、東国諸豪族が王権の施策に相乗りして、遠く離れた東アジア世界との関係形成を望み、その果実を地域社会の進展に反映させた実態にも言及した。その意味では、東国は倭王権のみならず東アジア世界とも強くかかわっていたのである。また、後期の屯倉の経営に関しては考古学的検討が難しい課題ではあるが、古墳後期の社会動向を考察するために不可避であるため、ケーススタディーとして提示を試みた。粗削りな論ではあるが、東国後期前方後円墳の重層性を理解するための一助となれば幸いである。

註

(1)——この意見は、文献史学における国造の成立期時期の定説的見解〔西日本が6世紀中葉、東日本が6世紀末とする。篠川1996〕に則ったものである。

(2)——七興山古墳と緑野屯倉を巡っては、屯倉と七興山古墳の成立を一体とみる意見（例えば坂本1995に代表される）が主流であるが、屯倉成立は七興山勢力の解体後とする意見〔加部2013〕もあり、筆者もこの立場を取る。

(3)——『日本書紀』宣化元年条には、大王が中央豪族に命じて、膝下の地方豪族に屯倉の穀を北部九州に運ば

せ、那津官家を建てた記事がある。たとえば、物部氏に命じて尾張氏に尾張国の穀を運ばせたとあることから、中央氏族との連携のもと国内屯倉は国造級氏族が管掌し、王権に貢納の任を果たしたことが指摘されている。上毛野についても、在地上上毛野君氏が佐野屯倉・緑野屯倉の管掌を王権から委任されていた可能性を考えたい。これを差配した中央氏族に関しては、上毛野西部に多く史料がみられる物部氏が候補となるが、むしろ中央氏族化し、天武朝に朝臣の姓を得る上毛野君氏そのものであった可能性も併せて考えたい。

参考文献

- 赤塚次郎 1989 「断夫山古墳をめぐる諸問題」『断夫山古墳とその時代』東海埋蔵文化財研究会
秋池 武 2000 「利根川流域における角閃石安山岩の転石（河原石）の分布と歴史的意義」『群馬県立歴史博物館紀要』21
赤熊浩一他 2011 『反町遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
石橋 宏 2013 『古墳時代石棺秩序の復元的研究』六一書房
池淵俊一 2015 「意宇平野の開発史—5世紀代の評価を中心に」『前方後円墳と東西出雲の成立に関する研究』島根県古代文化センター
伊藤 循 1999 「筑紫と武蔵の反乱」『古代を考える—継体・欽明朝と仏教伝来—』吉川弘文館

- 大村 直 2015 「土器の移動が証明するもの—物流ネットワーク論批判—」『列島東部における弥生後期の変革』六一書房
- 加藤一郎 2008 「大山古墳の円筒埴輪」『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』六一書房
- 金井塚良一 2008 『馬冑が来た道—古代東国の新視点』吉川弘文館
- 加部二生 2013 「上毛野君の考古学的検討」『国造制の研究』八木書店
- 亀田修一 2012 「渡来人の東国移住と多胡郡建郡の背景」『多胡碑が語る古代日本と渡来人』吉川弘文館
- 川原秀夫 2005 「上毛野における氏族の分布とその動向」『装飾付大刀と後期古墳』島根県教育庁古代文化センター
- 川原秀夫 2012 「古代上野国の国内交通路に関する一考察」『日本古代の地域社会と周縁』吉川弘文館
- 草野潤平 2015 「切石積の技術系譜—横穴式石室の石積み手法からみた関東の動向」『駿台史学』150 駿台史学会
- 岸本直文 2010 「倭国の形成と前方後円墳の共有」『史跡で読む日本の歴史 2—古墳の時代』吉川弘文館
- 小島憲之・木下正俊・東野治之 1995 『新編日本古典文学全集 萬葉集 3 卷第十～十四』小学館
- 小林孝秀 2014 『横穴式石室と東国社会の原像』雄山閣
- 埼玉県教育委員会 2014 『史跡埼玉古墳群 奥の山古墳発掘調査・保存整備事業報告書』
- 坂口 一 2010 「群馬県下出土の布留式甕について」『中居町一丁目遺跡 3』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 坂本和俊 1995 「七輿山古墳の出現背景」『群馬考古学手帳』5 群馬土器観会
- 坂本和俊 1996 「埼玉古墳群と元耶志国造」『群馬考古学手帳』6 群馬土器観会
- 坂本和俊 2015 「集落遺跡が語る東松山の3～4世紀の社会」『三角縁神獣鏡と3～4世紀の東松山』東松山市
- 佐藤 信 2005 「多胡碑と古代東国の歴史」『古代多胡碑と東アジア』山川出版社
- 佐藤 信 2012 「古代の地方豪族と渡来人」『日本古代の王権と東アジア』吉川弘文館
- 篠川 賢 1996 『日本国造制の研究』吉川弘文館
- 志村 哲 1992 『七輿山古墳範囲確認調査報告書Ⅶ』藤岡市教育委員会
- 城倉正祥 2011a 「武蔵国造乱—研究の現状と課題」『史観』早稲田大学史学会
- 城倉正祥 2011b 「埼玉古墳群の埴輪編年」『埼玉県立史跡の博物館紀要』5 埼玉県
- 白石太一郎・杉山晋作・車崎正彦 1984 「群馬県お富士山古墳所在の長持形石棺」『国立歴史民俗博物館研究報告』3
- 白石太一郎 1992 「関東の後期大型前方後円墳」『国立歴史民俗博物館研究報告』44
- 白石太一郎 2003 「山ノ上古墳と山ノ上碑」『古墳時代の日本列島』青木書店
- 杉山秀宏・桜岡正信・友広哲也・徳江秀夫 2014 「群馬県渋川市金井東裏遺跡の発掘調査概要」『日本考古学』38 日本考古学協会
- 須永 忍 2013 「東国の国造制」『国造制の研究』八木書店
- 関 義則 2012 「埼玉古墳群の構成原理」『埼玉県立史跡の博物館紀要』6 埼玉県
- 十河良和 2007 「日置荘西町窯系埴輪と河内大塚山古墳」『埴輪論叢』6 埴輪検討会
- 田口一郎 1981 『元鳥名将軍塚古墳』高崎市教育委員会
- 田口一郎 2000 「北関東西部におけるS字口縁甕の波及と定着」『S字甕を考える』東海考古学フォーラム
- 田中広明 2005 「武蔵のミヤケ」『考古学ジャーナル』533 ニューサイエンス社
- 田中 裕 2011 「前方後方墳の歴史性」『古墳時代の考古学 3—墳墓構造と葬送祭祀—』同成社
- 館野和己 1978 「屯倉制の成立」『日本史研究』190 日本史研究会
- 玉村町教育委員会 2007 『砂町遺跡・尾柄町Ⅲ遺跡・中之坊遺跡』
- 津田左右吉 1950 「武烈紀から敏達紀までの書紀の記載」『日本古典の研究 下』岩波書店
- 徳江秀夫 2005 「上野地域の装飾付大刀と後期古墳」『装飾付大刀と後期古墳』島根県教育庁古代文化センター
- 徳江秀夫 2010 『七輿山古墳』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 新納 泉 2001 「空間分析から見た古墳時代の地域構造」『考古学研究』48-3 考古学研究会
- 西川修一 2001 「南関東における古墳成立前夜の社会情勢」『日本歴史』638 吉川弘文館
- 仁藤敦史 2009 「古代王権と後期ミヤケ」『国立歴史民俗博物館研究報告』152
- 橋本達也 2013 「祇園大塚山古墳の金銅装眉庇付冑と古墳時代中期の社会」『祇園大塚山古墳と5世紀という時代』六一書房
- 橋本博文・平野卓二 2006 「坂東」『列島の古代史 1—古代史の舞台—』岩波書店
- 土生田純之 2008 「古墳時代の実像」『古墳時代の実像』吉川弘文館
- 樋上 昇 2010 『木製品から考える地域社会』雄山閣
- 比田井克仁 1993 「山中式・菊川式東進の意味するところ」『転機』4 転機刊行会

-
- 比田井克仁 2004「古墳時代前期における関東土器圏の北上」『史館』33 史館同人会
日高 慎 2013『東国古墳時代埴輪生産組織の研究』雄山閣
広瀬和雄 1983「河内古市大溝の年代とその意義」『考古学研究』29-4 考古学研究会
広瀬和雄 2015「海浜型前方後円墳を考える」『海浜型前方後円墳の時代』同成社
福田 聖 2012『反町遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
深沢敦仁 2015「北関東北西部における様相と動態」『列島東部における弥生後期の変革』六一書房
菱田哲郎 2014「古墳時代の社会と豪族」『岩波講座日本歴史 1—原始古代 1—』岩波書店
福嶋正史 2000『新田東部遺跡群Ⅱ』新田町教育委員会
藤野一之 2007「古墳時代における藤岡産須恵器の基礎的研究」『群馬考古学手帳』17 群馬土器観会、
北條芳隆 2013「入植の波と那須の前方後円墳」『われ、西より来たりて那須の地を治める』栃木県立なす風土記の
丘資料館・大田原市なす風土記の丘湯津上館
北條芳隆 2015「関東地方への前方後円（方）墳の波及を考える」『三角縁神獣鏡と三～四世紀の東松山』東松山市
教育委員会
松尾充晶 2005「装飾付大刀と地域社会の首長権構造」『装飾付大刀と後期古墳』島根県古代文化センター
松戸市立博物館 2005『江戸川の社会史』同成社
中井正幸 2004「二つの前方後円墳」『古墳時代の政治構造』青木書店
松田 猛 2009『上野三碑』同成社
松本 完 1993「東海系土器群の受容と変容」『転機』4 転機刊行会
右島和夫 1990「古墳から見た5・6世紀の上野地域」『古代文化』42-7 古代学協会
右島和夫 1994『東国古墳時代の研究』学生社
桃崎祐輔 2010「九州の屯倉研究入門」『還暦、還暦？還暦！武末純一先生還暦記念献呈論文集・研究集』武末純一
先生還暦記念事業会
森田克行 2006『今城塚と三島古墳群』同成社
山田俊輔 2008「上毛野における畿内系埴輪の地域波及と展開」『古代文化』60-1 古代学協会
義江明子 1986『日本古代の氏の構造』吉川弘文館
若狭 徹 1990「群馬県における弥生土器の崩壊過程」『群馬考古学手帳』1 群馬土器観会
若狭 徹 2007『古墳時代の水利社会研究』学生社
若狭 徹 2008「岩野谷丘陵の開発と山名伊勢塚古墳」『山名伊勢塚古墳』専修大学文学部考古学研究室
若狭 徹 2011a「中期の上毛野—共立から小地域経営へ」『古墳時代毛野の実像』雄山閣
若狭 徹 2011b「上毛野における5世紀の渡来人集団」『古墳時代毛野の実像』有山閣
若狭 徹 2012a「耕地開発と集団関係の再編」『古墳時代の考古学 7—内外の交流と時代の潮流』同成社
若狭 徹 2012b「農業」『古墳時代研究の現状と課題（下）』同生社
若狭 徹 2015『東国から読み解く古墳時代』歴史文化ライブラリー 398 吉川弘文館
若狭 徹 2017『前方後円墳と東国社会』古代の東国 1 吉川弘文館

(明治大学文学部、国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2017年3月23日受付, 2017年7月31日審査終了)

Staged Development of Regional Governance in the Eastern Provinces in the Kofun Period : Focusing on Kamitsukeno Province

WAKASA Toru

With focus on Kamitsukeno Province (the present-day Gunma Prefecture), one of the Eastern Provinces (the present-day Kantō region), this article examines the different stages of regional development and social transformation in the Kofun period. In the first half of the early Kofun period, large-scale mass immigration from the western Tōkai region promoted large-scale wetland development in the Kantō region and the construction of an inland water transportation network connecting the Kinai and Inland Kantō regions. The Yayoi people who had originally inhabited the area were resettled, and chiefs who had achieved higher agricultural productivity built large-scale keyhole tombs with a quadrangular or round rear portion.

In the second half of the early Kofun period and the beginning of the middle Kofun period, the largest chief tomb was built to the same design standards as the Saki Tumulus Group. This implies an alliance between its occupant and the Saki royal authority in Yamato. At the same time, chiefs selected their representative and brought about half of the land area of Kamitsukeno Province under his control, mainly for two purposes: (1) constructing a region-wide water transportation network linking multiple rivers and (2) getting hold of regional transportation hubs. Moreover, a large residence was built for the representative chief, serving as a symbol of group consensus building.

In the first half of the middle Kofun period, Ōta Tenjinyama Tumulus, the largest keyhole tomb in the Eastern Provinces, was constructed. This tumulus implies an alliance between its occupant and the royal authority that built the Furuichi Tumulus Cluster in Kawachi. The reason for the emergence of such large keyhole tombs is considered because a diplomatic and military leader was appointed for inter-state interactions and overseas expansion in response to the request from the Yamato polity around that time, while documents imported from the Korean Peninsula were introduced into the Eastern Provinces. In the second half of the middle Kofun period, Chinese and Korean immigrants and their technologies eliminated the need for chiefs to select their representative. The chief of each water system organized a group of Chinese and/or Korean immigrants to activate the regional economy.

In the reign of Emperor Keitai in the late Kofun period, Nanakoshiyama Tumulus, the largest tomb in the Eastern Provinces, was constructed. After the decline of the lineage that built the

tomb, multiple medium-scale keyhole tombs were constructed simultaneously. By examining the development of these archaeological sites and reviewing historical written sources, such as stele texts, *Nihon Shoki* (*Chronicle of Japan*), and *Man'yōshū* (*the earliest extant anthology of Japanese poetry*), this article analyzes the establishment of miyake (estates designated by the Yamato Court for rice production) and the dynamics of regional development. This article also examines the Musashi-no-Kuninomiya-suko War as well as the actual state of Midono-miyake and Sano-miyake and their relationships with Kamitsukeno-kuninomiya-suko (Provincial Governor of Kamitsukeno)

Key words: Mass immigration, lowland development, water transportation hub, military leader, imported technology, miyake, kuninomiya-suko